

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

翻訳通信 別冊

仁平和夫小論集

翻訳のコツ

2002年8月24日、ノンフィクション翻訳家の仁平和夫が死亡した。享年52歳。翻訳家のつねとして知名度は高くないが、主に経営関係のノンフィクション出版翻訳の分野で、おそらく並ぶものがないといえるほどすぐれた実績を残している。

9月24日に発行した追悼特別号と仁平和夫小論集が好評だったため、ひとつにまとめた別冊を発行する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

目次

翻訳のコツ

仁平和夫が1994年から97年にかけて『翻訳通信』第1期に寄稿した小論を再録する。*は9月24日発行の「仁平和夫小論集」で手違いがあり抜けていたものである。

| 日本語らしさを考える | | エッセー | |
|---------------------|----|-------------------------|----|
| 受け身表現 | 1 | パラダイム | 20 |
| CAUSE-EFFECT | 2 | 仁平翻訳事務所 | 21 |
| 無生物主語 | 4 | 二月の大掃除 | 23 |
| 形容詞連発 | 6 | 「おかあさん」と「おっかさん」 | 24 |
| 最上級 | 8 | authority vs legitimacy | 25 |
| 実用文と無用文 | 10 | 金持ちと貧乏人 | 27 |
| 日本語の不思議 | 12 | いい時代が来る | 28 |
| 「腹を抱えて笑う」と「ぶっと吹き出す」 | 13 | 今世紀最大のミステリー | 30 |
| 文章について | | おすすめの一冊 | |
| こぶしだらけを啜う | 15 | 酒井邦秀訳ネズビット『よい子連盟』 | 32 |
| 文章の寿命 | 17 | 梅田星也著『日本語先生奮闘記』* | 33 |
| 漢字のこと、ルビのこと | 18 | 玉村豊男『種まく人』 | 35 |
| 繰り返し* | 19 | この世で一番安い本 | 36 |
| | | 『日本語誤用・慣用小辞典』 | 37 |
| | | 『早引き - 連想語辞典』 | 38 |
| | | 『本が好き、悪口言うのはもっと好き』 | 38 |

劇評

仁平和夫が22歳のとき、『映画批評』1973年1月号に掲載された唐十郎の劇評を紹介する。9月24日の特別号では抜粋だったが、ここでは全文を掲載した。

| | |
|----------------------------|----|
| あの不埒な乞食どもがひとたび町に火を放てば..... | 40 |
|----------------------------|----|

付録

| | |
|--|---------|
| <small>いちご</small> 一期は夢よ - 天才翻訳家、仁平和夫 | |
| | 山岡洋一 42 |
| 弟・仁平和夫 | 仁平勝 43 |
| 仁平訳『トム・ピーターズの起死回生』 | |
| | 山岡洋一 44 |
| 個性豊かな文章家 | 嶋田水子 45 |

受け身表現

むかしむかし、語学学校で英語を勉強をしたとき、Writing の授業で頭にたたき込まれたことを今でも思い出すことがある。英語を書こうするときではなく（そんな機会はないし、また書けもしない）、日本語らしさとはなんだろうかと考えるときに、ローレンス・シーザー先生が唱えていた「3原則」を思い出す。

- (1) 名詞と動詞だけで書け。形容詞や副詞をむやみに使わない。
- (2) 能動態で書け。受動態を使わない。
- (3) cause-effect をはっきり書け。

(1)については異論もあるだろうが、基本的には（とくに実用文では）、冗長な表現を避け、簡潔にして要を得た文章を書こうとする姿勢に日英の差はない。

問題は(2)と(3)である。シーザー先生が口を酸っぱくして、この2つの原則を繰り返したのは、日本人が英語を書くとき、となく受動態が多くなり、cause-effect が曖昧になるからだろう。ということは、裏を返すと、「受け身」表現をうまく使い、cause-effect（因果関係）を曖昧にすると日本語らしくなるのではないだろうか。(2)と(3)は無縁ではないが、今回は(2)について考えてみたい。

「受け身」と括弧でくくったのは、文法用語に自信がないからで、英語の授業で習った受動態に限らず、「～させて下さい」「～してくれた」「～してもらおう」といった類の、正確な文法用語はさておき、「受け身」の気持ちがある表現をすべて含めて考えているからだ。

日本人は「泥棒が入った」とは言わずに「泥棒に入られた」と言う。「女房が逃げた」とは言わずに「女房に逃げられた」と言う。「女がふった」とは言わずに「女にふられた」と言う。「あの人が助けた」とは言わずに「あの人が助けられた」と言う。必ずそう言うとは限らないが、そのほうが日本語らしい。

しかし、欧米人はそう言わないから「泥棒が入った」と訳す。欧米人の思考・行動様式を伝えることも翻訳者の仕事だという説にも、たしかに一理はある。しかし、「入った、逃げた、ふった、助けた」という表現がえんえんと続くと、それを読んでいる日本人はだんだん苛立ってくる。日本の文化は能動表現を許さないからだ。

韓国の女性と日本の男性が結婚して、言葉がよく通じなかったうちは仲むつまじかったのに、新妻がけなげに日本語を勉強し、日常会話を日本語でやりとり出来るようになると、急速に愛が冷めていくのだそうだ。韓国人にとって日本語は非常に覚えやすい言葉で（そのためにナメてしまうこともあるらしい）、途中までは急速に上達するが、「受け身」表現のところまで来ると、ぱったり進歩が止まってしまうという。なぜ、そういう言い方をしなければならないのか、理解できないからだという。頭脳明晰な呉善花さんは「あなたに死なれると困る」という言い方がどうにも理解できなかったと書いている。

「あなたが死ぬと私は困る」となぜ言わないのか。そう問い詰められても、大方の日本人は答えられない。しかし、まともな社会生活を送っている日本人なら、無意識のうちに「受け身」表現が口をついて出てくる。このへんの呼吸を何度も間違えていると、社会からつまはじきにされるからだ。

二人の間で、辛い仕事と楽な仕事のどちらかを選ばなくてはならない場合、「私こっちをやります」と言っているのは、辛い仕事を選ぶ場合だけだ。楽な仕事を選ぶ場合には、まずくどくどと言いつつしてから「私にこっちのほうをやらせていただけないでしょうか」と言わなくてはならない。何の言い訳もなしに、いきなり「私こっちをやります」と楽な仕事を選べば、なんて勝手なヤツだと思われる。どんな親しい仲でも、言葉づかいこそ違い、事情は同じで、「私こっちやる」とは言わずに、「ねえ、私にこっちやらせて、お願い」と言わなくてはならない。

「私は儲けている」と言えば、なんだ、まわりに助けられてなんとか食いつないでいるくせにと言われるに決まっている。「儲けさせてもらっています」と言えば合格点で、その前に「おかげさまで」のひとことが言えれば、あの人はなかなか有能だと評価される。

ではその動作主は誰なのか。英語なら、be + 過去分詞ときて、たいがいの場合、by のあとに動作主が示される。しかし、日本語ではそれを明らかにしてはいけない。それが明らかではない場合が多いし、明らかの場合でも、それははっきりさせるとカドが立つ。しいて言えば「おてんとうさま」というぐらいが無難である。これは、因果関係をはっきりさせないという、(3)にもつながってくる。

政治家は「私はこのたび総理大臣になりました」と

は決して言わない。そんな言い方をする政治家は絶対に総理大臣にはなれない。普通、「私はこのたび、はからずも、内閣総理大臣を拝命しました」と言う。政治家の「はからずも」は、商売人の「おかげさまで」に当たる。「拝命」が受け身である。田中角栄は世話になった財界人を料亭に招待し、「私はこのたび、はからずも、いや、全智全霊を傾けて、内閣総理大臣になりました」と言ったが、それは角栄一流のウィットであって、額を畳にぴったりつけてそう言ったのである（私がそれを見たわけではないが）。

わたしは処世訓を垂れているのではない。文化を論じているのだ（カックイー！）。翻訳に話を戻すために、例文を少々。

I felt she let me down.
(裏切られた。してやられた)
Could you give me some pointers on... ?
(アドバイスしてくれませんか)
They may try to be helpful, but there is a limit.
(手助けはしてくれるだろうが、)
That politician has had bad press.

(あの政治家は新聞でたたかわれている)
Where can I have my camera fixed ?
(カメラをどこで修理してもらえるかしら)
It almost sounds mind-bending.
(圧倒される感じ)

いずれも英語は受動態では書かれていないが、これを訳そうとすると、自然と口をついて出てくるのは()内に示したような受け身表現ではないだろうか。

文化は性愛のかたちを決定するから、濡れ場になると、受け身表現が断然有利になる。「お前なら俺の気持ちかわかるだろう」ではなく「わかってくれるやろな」、「あなたはわたしを愛している」ではなく「あたしのことを思ってくれて」、「強い腕が彼女を抱いた」ではなく「彼女は強い腕に抱かれた」。いずれも、村上博基訳。急所で「受け身」を使うと、言い尽くせないものが残り、色気があって、余韻があり、つまり日本語らしくなる。そう思うのはわたしだけだろうか。
(1994年4月号)

CAUSE - EFFECT

日本語らしさとは何かと考えているうちに、やはり「お手本」がほしいと思うようになった。「美しい日本語」という観念をいくら振り回しても、大向こうはなかなか唸ってくれそうもない。

さて、誰の文章がいいだろう。水戸のジジイの印籠ほどの効き目はなくても、すこしは姿勢を正して聞いてみようかという「正調ソーラン節」に匹敵するような格の高い日本語はないものか。古典をもちだせば、わたしの教養をひけらかすにはいいが、やはり現代文でないと意味がない。しかも、評価が定まったものでないといけない。

村上春樹や椎名誠では、うるさいヤジが予想される。三島由紀夫でもまだ安心できない。森鷗外では古すぎるといわれそうだが（わたしは古いとは思わないが、鷗外の名文は和漢洋が渾然となって、「日本語らしさ」という観点から論じるには、わたしの教養が足りない。それに、鷗外は日本語を作った形跡がかなりあり、単語レベルでいえば、民謡などがそうだ。鷗外がフォークソングをそう訳すまで、日本語に「民謡」という語彙はなかった）。

そこで思いついたのが、川端康成である。川端の文章はまだ十分に新鮮だし、それを「日本語らしくない」という人はいないだろう。幸い、川端の主な作品

には、サイデンステッカーの名訳があり、日本語と英語を比較するにはもってこいである。そして、わたしの本箱には何冊か埃をかぶっている。

きーめた。これからは、川端康成の『山の音』と、サイデンステッカー訳"The Sound of the Mountain"をテキストにする。文句あつか。三島由紀夫は『山の音』が川端の最高傑作だと言っており、わたしもそう思う。川端の文体で実用文が書けるかという文句も予想されるが、その問題については機会を改めて論じる。

今回は、cause-effect について。

わたしはまず、サイデンステッカーの"The Sound of the Mountain"を開き、原因・理由を示す接続詞を片っ端から調べてみた。because はうんざりするほど出てくる。as は一か所もない。since と for はチラホラ顔を出す(以上4つの接続詞の用法の違いは、よくわからない)。そして、おなじみの so ~ that の構文はけっこう出てくる。

そこで、川端の『山の音』を開いてみる。まさか、「なぜならば」「 のために」「 によって」「あまりにも なので」なんていう暑苦しい日本語は出てこないだろうなあ。

さあ、お立会い。ここが英語の真髓であり、日本語の真髓なのです。

まずは、because から、
I felt sorry for her because of the way Mizuta died, and couldn't refuse.

水田がああいう死に方だし、僕は細君の顔を見ると、なんだか気の毒でことわれなかった。

But, perhaps because his self-respect was on trial, he answered irritably when....
しかし、信吾の自尊心は屈辱に堪えていたのか、

Control yourself.
I can't control myself because I have no place to control myself in.
まあ少し落ちつけ。
落ちつくところがないのに、落ちつけないわ。

Perhaps because Yasuko was stubborn, perhaps because she was healthy, she disliked hot-water bottles even at her age.
保子は頑固なのか、元気なのか、この年になっても、湯たんぼが嫌いだった。

You don't live longer just because your hair goes dark again.
髪の毛が黒くなったところで、いのちは延びやしない。

She can't give a sign of her jealousy because she's afraid of what it might do to you.
あの子はお父さま(=you)に悪いと思って、やきもちもやけやしない。

I've always been told that you don't give people combs, because that means breaking off relations or something of the sort.
たしか櫛は、縁が切れるとかで、人にあげるものじゃないと言ったと思いますが。

Because I know how it was before birth, I have no parent to love. Because I have no parent, neither have I child to be loved by.
生まれぬ前の身を知れば、あはれむべき親もなし。親のなければ、我がために心をとむる子もなし。

Turning a No mask slightly downward is known as 'clouding' because the mask takes on a melancholy aspect; and turning it up is known as 'shining' because the expression becomes bright and happy.
(能)面を伏目にうつ向かせるのを曇らすと言って、表情が憂愁を帯び、上目に仰向かせるのを照らすと言って、表情が明朗に見える。

And when she died her husband's family had sent it back, because it was so important to her father, and because they

had no one look after it.
しかし娘が死ぬと、娘の実父の大事な盆栽だし、婚家で世話する者はないし、返してよこしたのだろう。

お次は、since

Since the ward office had accepted the divorce notice, it would seem that he was not registered as dead.
区役所で離婚届を受けつけたところを見ると、戸籍は死亡になっていないのだろう。

It seemed odd to him that he should have dreamed of Matshshima, since he had never been there.
松島へ行ったことがないのに、松島を夢に見たのは不思議に思った。

最後に、so ~ that....

It happend so frequently that he gave it little thought.
いつものことで気にはかけなかった。

He was so afraid of her that he couldn't go home at night.
夕方は女房がこわくて帰れない。

the hair and lips of the jido mask struck him as so beautiful that he wanted to cry out in surprise.
慈童の毛描きや唇が美しく見えて、あっと言いそうだった。

Shuichi's snoring was so loud that even Shingo could hear it.
修一のいびきが信吾にまで聞こえた。

Had Kikuko so grown that Shuichi noticed the difference when he held her in his arms ?
修一が抱いてみて気づくほどに、菊子は背がのびたのだろうか。

.... so intense a yearning for a person long dead that he wanted to rush into her arms.
また昔の人が、すがりつきたいように恋しいのだった。

日本語の cause-effect の表現というのは、「雨降って地固まる」という文型に尽きてしまう。

「雨降って」の「て」が、いつも原因・理由を示すと限らないことは、みなさんご存じのとおりである。しかし、そのひと文字で、複雑な因果関係を表現できる。それが日本語なのである。

「雨降って」を英訳するとなると、どうしても because が必要になる。文の構造も、そう単純にはならないだろう。「いや、そのためにかえて」という意味合いを出すには、indeed because とは言わなくては

ならないかもしれない。

つまるところ、日本語というのは、先の例文でも紹介した能面のようなものだろうか。一見、無表情の面が、ちょっと俯くと憂いにかげり、ちょっと仰向くとほのかに明かりがさす。ガハハと笑わずに、そっとほほえむ。ギャーギャーわめかずに、ふとうつむく。その中に、しびれる歓喜と身を切られる悲しみがあって、美しい日本語が成り立つ。これは「曖昧」なのではなくて、「洗練」なのですね。神童でない幼稚園児なら、モーツァルトよりもアニメのテーマソングを喜んで聞くでしょ。それと同じような話だよ、きっと。

『山の音』をていねいに読んでいくと、文の論理や構造をさりげなく、たおやかに支えているのは、「てにをは」の1文字か2文字であることがわかる。翻訳者は、男なら二の腕に、女なら腿の奥深いところに、「てにをは命」と刺青しなければならない。

以下は余談なので、御用とお急ぎの方は、さっさと通りすぎてください。

日本は因果関係を曖昧にし、全員に責任があるという考え方をするので、結局だれも責任をとらない総無責任体制ができあがってしまう。それに対して欧米では、因果関係を明確にし、責任がある者となし者を峻別するので、非があった者はいさぎよく責任をとる。そんな話をよく耳にする。しかし、その一方で、「アメリカでは常に責任の所在を明らかにしようとするだけに、なんとか責任を回避しようとするテクニックやシステムが巧妙かつ隠微に発達している」と指摘する人もいる。

先日、セレブス海にダイビングに出かけたときの話。

器材の積み込みが完了し、スタッフもダイバーもボートに乗り込んで、さあ定刻どおり出発というときになって、あっ、ひとり足りない。よくある話である。

リストを調べたら、マーチンが来ていないことがわかった。前日、いっしょにチェック・ダイブをやったクリーンカットのアメリカ人だ。

急ぐ旅ではなし、かりに出発が1時間遅れても、スケジュールが大きく狂うわけでもない。しかし、20分も待たされると、誰も口には出さないが、おいおい何やってんだよなあもうという苛立ちがボートの中にたまってくる。

マーチンがはたしてなんと言うか、わたしは楽しみになってきた。責任を追求されそうなき、アメリカ人は口が裂けても sorry とは言わないという伝説があるからだ。

でもここは、sorry と言うっきゃないよね。謝っても、罰金をとられるわけじゃなし、みんなが眉をつりあげて非難する問題でもないしさあ。絶対に sorry と言うよね。千円くらいなら賭けてもいい。

30分も過ぎたころ、棧橋の向こうにマーチンの長身が見えた。日本人だったら、すいません、申し訳ないという気持ちを全身に表し、演技過剰なくらいにあたふたと走ってくるころだ(どんな図太いひとでも、少なくともみんなの目から見るところに来たら小走りには走りだすよね)。ところがマーチン、慌てず騒がず、遠くの島などを眺める風情で、悠然と大股で歩いてくる。それがまた、ながーいながーい棧橋なのでありました。

そして、みんなの視線を一身にあびて、ひらりとボートに飛び乗ったマーチンは、開口一番、にっこり笑ってこう言った。

I'm not guilty.

そして勿論、そのあとに because ときて、えんえんと言いつながるのでありました。あーあ。

(1994年5月号)

無生物主語

ゴールデンウィークに、十年あまり会っていなかった高校の同級生に吉祥寺でばったり出くわし、居酒屋に入って昼間から飲みはじめた。「おまえ変わらないなあ」と言いながら、相手の頭にどつと降る霜にはひそかにおどろく。相手もこっちの頭にさりげなく視線をなげているところを見ると、秋の深まりに驚いているのかもしれない。「なんで食いつないでいるんだ」と聞かれて、「ホンヤク」と答えたらびっくりしていた。

霜降り頭は大手家電メーカーの課長、できのわるい昔の仲間うちでは、できのいい部類に入る。高校時代、

数学の試験で、こっちが40点をとってバンザイと狂喜しているときに、80点をとって頭を抱えていた男だ。長い英文を訳す必要があって、翻訳会社に依頼することがあるという。すると、おそろしいモノが出来上がってきたと、まあ、よく聞かされる話になった。

「あの無生物主語はなんかならないのかなあ」と言うから、今度はこっちがびっくりした。「無生物主語」なんて言い方はギョーカイ用語だとばかり思っていたのに、ギョーカイ外の人までそんなことを言う。相手の言いたいことはすぐにわかった。そこで、「無生物主語を使わないと、日本語は書けないよ」と言う

と、キョトンとしている。

「おまえだって、のべつまくなし使っているだろう。雨が降る。夏が来た。話がとぎれる。株が下がった。時が流れる。戦慄が走った。笑みがこぼれる。怒りが爆発した。例をあげていくのもバカバカしい」

霜降り頭は虚をつかれた感じで、上唇にビールの泡をつけて間抜けな顔をしている。

「つまり、こう言いたいんだろ。英語の文法で習ったSVの構文なら、いくら無生物主語を使ってもかまわない。ところが、SVO、SVOO、SVOOCの構文となると、使ってはいけない。海が荒れるのはいいけど、海が贈り物をしたりするのは困ると言いたいんだろ」

「なるほど、言われてみればそうかな」

「だけど、それもおかしい。夢は枯野をかけめぐるのはいいけど、天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ、はいけないということになる」

「ううっ。でも、その天つ風、主語じゃなくて、呼びかけだろ？」

「おなじことだよ。その呼びかけにこたえれば、天つ風雲の通ひ路吹きとぢぬ、ということになる。神様、お助けくださいと頼めば、お助けくださるにせよ、くださらないにせよ、主語は神様になる」

「こりゃ一本とられたかな。それじゃおまえは、翻訳をするとき、SV以外の構文でも、無生物主語をさかんに使っているわけか」

「いや、心して使わない。使うべからずということで、天下の大勢は決している」

「多勢に無勢でひるむとは、おまえらしくもないな」

「バカと議論するな。はた目には、どっちがバカだかわからない。これ、マーフィーの法則」

「ははは。まあ、そう言うな。夕方まで、オレは何もすることがないんだ。議論じゃなくてさ、無生物主語を肴に、ゆっくり飲もうじゃないか。おねーさあん。生ビール、お代わり。ヤッコももうひとつ。最近、豆腐がむやみにうまくてね。バブルの頃は、ヤッコなんて頼もうもんなら、軽く無視されるか、スゴイ目で睨まれた。いまじゃ、はーい、ヤッコいっちょーなんて景気のいい声を出してくれる。不景気もまんざら悪くないな」

「風があの子をさらっていった。オレは美しい日本語だと思うけど。風によって、あの子はさらわれた。そう書けて言うのか」

「うーん。さっきの天つ風もそうだけど、それは、かなり詩的表現じゃないのかなあ。詩なら、何を言ってもいいからね」

「じゃあ言いなおそう。円高が不況に追い打ちをかけた。これはどうだ」

「うーん。しかし、それはその、うーん。風も円高も、擬人法とかなんとかという特殊なケースじゃないのか」

「しゃらくさい。森羅万象に神が宿るまほろばの国で、擬人法もへったくれもあるか。やまとの国では、草木一本にも、石ころひとつにも、魂が宿っているんだよ。星はまたたき、草はうなだれ、風は泣き、海は吠え、花は笑い、山は眠る、これはみんな擬人法じゃないんだ。そんな言い方をするのは、この世で人間さまが一番えらいと思っているヤツだけだよ」

「海は贈り物をくれてもいいわけか」

「海から贈り物を受け取れないようなヤツは人間じゃないね」

「ここの付き出し、うまいな。これも、海がくれた贈り物というわけか」

「力をもいれずして、天地（あめつち）をうごかし、目に見えぬ鬼神（おにがみ）をもあはれとおもはせ、ってね。この主語、なんだと思う」

「なんだか知らないが、生物じゃないことだけは確かなようだな。しかし、古典はちょっとやめてくれ。オレは古文の授業はいつも眠ってた。現代文ではどうなんだ」

「魔が通りかかって山を鳴らして行った」

「なんだそれ？」

「川端康成の『山の音』」

「だめだめ、めっちゃめっちゃ文学的表現だね。NHKのニュースじゃ使えない」

「そんなことはないさ。石油ショックが日本経済を大きく揺さぶった。それと同じ構造だよ」

「うーん。こっちも、おかしな例をたくさん挙げて反論できたらいいんだけど。いま、とっさには思いつかない」

「たとえば、It broke the ice. それで座をうちとけさせたとは訳さず、それで座がうちとけたと訳せと言いたいんだろ。おかしな例はいくらでも挙げられる。だけど、おまえはさ、酔っぱらいがゲロゲロ吐いているのを見たんだよ、きっと」

「酔っぱらい？」

「そう。悪いのは酒じゃなくて、酒の飲み方だって話」

「禁酒法は困ってわけか」

「このあいだ、邱永漢の『日本人はアジアの蚊帳の外』を読んだんだけど、まえがきにこう書いてある。

『日米間の摩擦はますますエスカレートして、為替レートが日本の輸出にストップをかけるか、管理貿易への移行が日米間のスケジュールにのぼってくるよう

になるだろう』って。何かおかしい？ 無生物主語のオンパレードだけだ」

「うーん。それは、ずっと読んじゃうような気がする。だけど、少なくともオレが目にするかぎりでは、奇をてらっている感じのものが多いような気がする。なにか必然性があるのかなあ。ここはどうしても、無生物主語を使わなくちゃいけないという」

「必然性といわれても困るけど、たとえば、『吉田健一との出会いが、わたしの人生を変えた』というのと『吉田健一と出会って、わたしの人生は変わった』というのとじゃ、出会いの衝撃がまるで違う」

「そんなに違うかなあ」

「その違いが分からないヤツは、意味が通じるだけの日本語を書いていけばいい」

「意味が通じるだけじゃダメだとなると、どんどん詩の世界に近づいていく」

「いや、真実に近づくとってほしいね。たとえばね、台湾は輸出加工区を作った。それで、経済進出が帝国主義と違うことをバツと証明しちゃった。あわてて、ほかの国がマネをした。そして、そのマネに成功した国から順番に、経済が離陸していった。邱永漢はこう書いている。『輸出加工区という着想が世界に与えた衝撃は大きかった』。この一行で、台湾の凄さがバーンとわかっちゃう。それ以外の書き方をすると、ピントがぼけるような気がする」

「なるほど」

「邱永漢が書くものはね、出す本、出す本、よく売れるそうだ」

「『中国人と日本人』。あれは、おもしろかった」

「うん。経済を論じるには、理屈がいる。だけど、理が勝たない。理と情のバランスが絶妙なんだ。だから説得力がある。そして、文章に艶（つや）がある。売れないヤツがいくら歯ぎしりしても、とうてい及ばない文徳だね」

「ブントク？」

「そう、人徳じゃなくて、文徳。もっとも、文は人なりって言うけどね」

「その文徳と、無生物主語と、何か関係があるのか？」

「だからさ、無生物主語を使うべきか、使わざるべきか、そんなことを考えながら書きちゃいないって話さ。奇をてらうんじゃない。“しな”をつくって、はじめて匂う色気なんて、ほんとうの色気じゃない。名文はおのずからあふれでるってわけさ」

「文徳とか、名文とか、オレにはよくわからない。ちゃんと意味が通じるなら、それで立派な日本語だとオレは思う。おまえは、どんな日本語を書きたいんだ」

「天地をうごかせなくても、読む人の胸をキュンとさせるようなやつを書きたいね」

「胸キュンか。たしかに、そういう日本語もないと、世の中つまらないかもしれない。しかし、門外漢のオレが、無生物主語がどうのこうのと、きいたふうな口を聞いて恥ずかしいよ。プロはやっぱり、いろいろ考えているもんだな。シロートは口を慎むべし」

「いや違う。無生物主語なんて、専門家が言うことを聞きかじって言うからいけないんだ。門外漢やシロートの意見が一番ありがたい。専門家は技術的なことしか言わないけど、シロートはずばり核心をついてくるからね」

「たとえば？」

「仁平の文章は『えらそうだ』と言われたことがあるよ。あんまりえらそうなんで、いくら正しいことが書いてあっても、信じる気はしないってさ」

「するどいね」

「するどすぎるよ。オレはその日、一晚眠れなかった」

「あははは。おねーさあん、お酒ーっ」

(1994年6月号)

形容詞連発

とにかく英語というのは、形容詞や副詞の連発が大好きなのだ。2連発でもうんざりなのに、3連発、4連発と攻めてくるときがある。むかし、ある週刊誌の翻訳をやっていたとき、英語で形容詞が3つ並んでいるときには、日本語も形容詞を3つ並べてくださいと言われて目をむいたことがある。

日本語には熟語というものがある。熟語といわれるくらい熟しているから、これをつい一義と錯覚してしまう。しかし、二字熟語なら二つ、三字熟語なら三つ

の意味がある。だから、たとえば、

I felt safe and secure with my company right up until the ax fell.を

「首を切られる直前まで、自分は安泰だと思っていた」と、英語二語を「安泰」の一語で訳せる。

He could remember only fragments of the dream, but the color of the pines and of the water remained clear and fresh.を

「松の色や海の色は鮮明に残っていた」と、英語二

語を「鮮明」の一語で訳せる。

つまり、複雑な数式をもちだすのは気がひけるが、二字熟語を使えば、英語 2 語 = 日本語 1 語という等式が成り立つのである。きみたちには少し難しすぎるかな。

わたしは基本的に「規制緩和」を主張する管理統制不信派だから、日本語の形容詞・副詞の連発を禁止すべしと言うつもりはない。「さあ、明るく元気に歌いましょう」というオバハンの雄叫びも、「強くたくましく生きていきます」という青年の主張も、まあ許してあげる。しかし、「あの人は律儀で実直な人だ」とか「おたくのお婆さんは、健康で達者で丈夫ですね」とか言うのは、お互い慎もうではないか、おのおのがた。

文句あっかのテキスト、サイデンステッカーの The "Sound of the Mountain" をひらき、形容詞・副詞(例外的に名詞)の連発箇所を探し、川端の『山の音』と比べてみる。

Locusts were strange and interesting creatures to Satoko, child of the city:

東京の里子は蝉がめずらしく、

with somber, shadowy eyes, she would throw the insect...
暗い目つきで、

One shoulder dropped a little, giving impression of weariness and emaciation.

肩も片方が少しさがって、やつれた感じだった。

Yet she answered coolly, her voice restrained and distant. And what will do if I take you there?"

しかし固い声で、

「行って、どうなさるんですか」と冷たく言った。

the skin, smooth and lustrous as that of a girl,
少女のようななめらかな肌が、

Defeated by the powerful colors of the girls' kimonos, they seemed pale and wan.

花の色は振袖のきつい色に負けて、薄く見えた。

A naive, uncomplicated dream

無邪気な夢

They had generally been of women he would have to call coarse and vulgar.

たいてい相手はいわゆる下品の女だ。

But perhaps he would but be laughed at and called weak and feckless.

いくじさを笑われるだけかもしれない。

Her voice was strained and unnatural.

妙な調子で言って、

It had been a damp, drizzly day in mid-August.

八月の中ごろで、小雨の日だった。

サイデンステッカーが川端の日本語を訳すとき、1語ではうまく表現できないので、2語をつらねて重層的なイメージを作ったという面もあるかもしれない。しかし、それは本質的な問題ではない。英語は形容詞や副詞を並べることがごく自然なのである。そうしないと、サマにならない。こまどり姉妹のように、片方だけでは舞台に立てないのである。形容詞1つだけでペリオドを打ってしまうのは、尻をふかないでトイレを出てしまうようなものなのである。

しからば、日本語はどうか。

"The Sound of the Mountain" を読んでみると、かりにこれを日本語に訳すとしたら、どうしたって形容詞や副詞を連発するっきゃないという箇所がいくつもあつた。ところが、川端の原文をみると、するりと罫をくぐりぬけるように連発になっていないのである。

たとえば、

Her face was round and sunburned, but her arms and legs were thin.

女の子は日焼けして、顔はふっくら円いのに、手足は痩せていた。(「ふっくら」は「円い」に掛かる副詞 - - 念のため)

but she was thirty and married, and matters are not simple for father in such cases.

嫁に行つて三十になる娘は、親もそう簡単には割り切れない。

One might have suspected cruelty and malice.

残酷な悪意を含むかと疑われるほどだ。

the impact of the blood relation became leaden and oppressive.

肉親の重苦しさがなおかぶさってくる。

Apparently the surprise had made the girl a bit giddy. The note of discord struck Shingo as dangerous and touching.

調子っぱずれなのが、信吾にはあぶないものと見られて、可憐になった。

そのとき、天の啓示か、イナズマのようにわたしの頭に閃くものがあった。そもそも日本語というのは、

由緒正しき日本語というもんは、形容詞や副詞をむやみに並べたりしないものではないか。

わたしは古典を引っ張りだして探しはじめた。見つからない。まったく見つからないのである。三十分ほどして、投げ出した。ふむ、名案がある。

ここで大富豪のわたしめが、貧民救済の意味も込めて、大々的に懸賞募集をします。これを読んでもみなさん、明治より前に書かれたものの中から、形容詞または副詞が並んでいるあられもない姿を見つけてください。一箇所につき金十円を進呈します（ああ、民の歓喜の声が聞こえるようだ）。

そこでまた、待てよと思った。わたしのリサーチは、少し平安朝に偏りすぎた。当世のものは形容過剰だが、昔のものは形容過少で困る。平安朝は読者対象が貴人だからいけない。読者が下賤の方へぐっと広がってくれば、書く方だって客あつての商売、そうそっけない筆使いもできまい。いい女を出すなら、ふるいつきたくなるような女をありありと目の前に描いてみせなくちゃいけない。『伊勢物語』のように「いとなまめいたる女」と言うだけじゃ、木戸銭払った客は帰らないだろう。

わたしはふたたび書庫へ向かった。

しかし、関が原をわたり、元禄を通り、文化、文政

を過ぎて、天保にまで入っても、ついに形容詞・副詞の連発は見つからないのである。

たとえば、天保年間の『梅暦』。丹次郎が鬱々とすごす侘すまいに、「御免なさいまし」と米八が入ってくる場面。まずは服装（なり）の説明から入るのだが、当世の人には何のことやらさっぱり分らないと思うので省く。「みだれし鬢の嶋田髻、素顔自慢か寝起きのままか、つくるわねども美しき、花の笑顔に愁いの目元」と、まあ、これが典型的な描写の手順。つまり、形容詞をだだだ並べるのではなく、髪はどう、肌はどう、目元はどうと、ひとつひとつ形容していくのである。

先日、中央沿線の妙に暗くて妙に明るい路地を歩いていたら、「お兄さんお兄さん、いい子がいるんですよ」と暗がりから声がする。「どんないい子」と聞くと、「そりゃあもう、ピチピチ、プリプリ、ムンムンのいい子です」という。

まったくもう、わけのわからない形容詞をずらずら並べおって。これを日本語の墮落と呼ばずしてなんと呼ぼうか。いや、日本語の破壊と言うべきか。わたしは憂国の情に沈みながら、ムラムラとこみあげてくるものがあつた。

「それで、いくら？」

(1994年7月号)

最上級

通商をしていると、両国の文化は似てくる。そんなことを、日下公人さんがどこかで書いていた。

日下さんがアメリカに行って、ある企業を訪ねると、壁に大きな紙が張ってあって「WA」と書いてある。なんですかこれ？と聞くと、おまえは日本人のくせに「和」を知らないのかと馬鹿にされたという。もうずいぶん昔の話である。

ちかごろはアジアを旅していて、コーヒーを注文すると、「ホットですか、アイスですか」と聞かれてびっくりすることがある。アイスをたのむと、近所の喫茶店で飲むのとほとんど変わらないアイス・コーヒーが出てきて、ウーンとうなってしまう。

先日、香港から帰ってきた友人が、「さすが本場のラーメンはちがう」と感心しているのを聞いて笑ってしまった。笑ったのは、わたしがたまたま何年前、テレビのドキュメンタリーを見ていたからである。本場のラーメンを求めて中国大陸を旅するのだが、行けども行けどもラーメンにありつけないというドキュメンタリーだった。そのかみ、香港にラーメンなどとい

うものはなかった。日本人観光客がラーメン、ラーメンとあんまりうるさいから、香港の料理人が、それはいったいどんな料理なのかと東京に勉強にきた。そして、東京とまったく同じものを作ってもつまらないから、少しちがうものをメニューに加えた。すると、日本人観光客は「さすが本場のラーメンはちがう」と感心して帰っていく。

文化ばかりでなく、体格も似てきた。わたしの姪は中学一年生にして、すでにわたしよりはるかに足が長い。

言葉も似てきた。最近、バタ臭い日本語を書く人がずいぶん増えた（「バタ臭い」という言葉も、もう死語かもしれない）。なかでも、いちばん英語に似てきたなと思うのが、最上級表現である。英語の最上級を直訳しても、怪しむ人は少なくなった。しかし、わたしにはこれがどうにも気になってしかたがない。「日本語らしく」ないのである。

ここで、英語の文法のおさらいをしておきます。

最上級には「絶対最上級」というものがあります。なぜ「絶対」というと、具体的な比較の対象がないのに、最上級を使っているからです。

たとえば、

(1) It was the most lovely flower in the garden.

(2) It was a most lovely flower.

(1) は普通の最上級。

(2) は比較の対象がないので、絶対最上級、most の意味は very と同じ。

(1) The flowers are most beautiful at this time of the year.

(2) I've wanted one of these for the longest time.

(1) は普通の最上級で、(2) は絶対最上級。

(1) は「いまが見頃」、(2) は「ずっと欲しかった」と、ぴったりの日本語が見つかるが、いつもそううまくいくとは限らない。

先日、ある本を訳していたら、次のようなチャプターの書き出しにぶつかって、目の前が真っ暗になった。

For the most important year of the most important part of his life to this point,

いかにも英語らしい表現だが、これに相当する日本語がはたしてあるのだろうか。真っ先に頭に浮かんだのは、秋山真之が草した日本海海戦の命令文「皇国の興廃この一戦にあり」だった。

Mount Fuji is the highest mountain in Japan.

これはもう、文部大臣賞受賞・青少年教育連盟推薦の最上級と言うべきか。「日本一」と訳しないと、非国民と呼ばれて石を投げられる。しかし、ごく普通の英語を読んでいると、この手の最上級は案外少ない。

Kazu, the most popular footballer in J League,

あるテレビ局の人気調査ではラモスが一位になったことがあるし、オールスター戦のファン投票では2年続けて最高得票は井原だった。しかし、日本語の「いちばん」はそんなに厳密に使うわけではないので、「客観的数値基準」がなくても、その貫禄さえあれば「いちばん」でも構わない。「カズはいちばん人気がある」と訳しても、抗議や脅迫の電話が殺到する心配はない。

しかし、次のような場合はちょっと困る。

the value added tax, the largest revenue item in Germany, まさかと思ったので、手元の資料を調べてみたら、

付加価値税は第3位だった。悩んだあげく「ドイツ最大の税収項目」と訳しておいた。手元の資料は少し古く、1位との差がそれほど開いていないので、ひょっとしたら、いまは付加価値税が1位になっているのかもしれないと思ったからだ。それに、そう訳さないというリーチは通らないと思った。

文法書で(1)に分類される最上級でも、「いちばん」ではないケースはけっこうありそうな気がするが、文例を十分に集める時間がなかったので、これは宿題にしておく。

(2) の場合はどうか。これは、前後関係で判断するしかない。文字面は同じ most depressed でも、「がっくり」という程度の場合もあれば、「ああ、もう生きていたってしょうがない」という場合もある。

第二次朝鮮戦争が勃発したらどうなるかという記事を読んでいたら、北朝鮮軍はかならず韓国の原発を次々と攻撃するだろう、そうなればチェルノブイリどころの騒ぎではなくなり、most dangerous と書いてあった。なるほど、こんな物騒な話はない。「とても危険」では間が抜けている。「ああ堂々の最上級」と言うべきか。

しかし、わたしの乏しい読書からいうと、学校で習ったほど、英米人が強い気持ちで最上級を使っているとは、どうしても思えない。

「いい女」というだけでは、なんか物足りないので、「いい女」とすこし力を入れてみせる。その程度の最上級が多いような気がしてならない。

いつものように、サイデンステッカーの“The Sound of The Mountain”から最上級を拾いだし、川端の『山の音』とくらべてみる。

A most unpleasing expression, thought Shingo.
いやな目つきだと信吾は思った。

The Indian girls were the most beautiful.
インドの娘さんたちがきれいだった。

I suppose she's about the most important after the chief cutter. They think very highly of her.

裁断の主任の次くらいですが、お店でも大事にされて。

The best thing would be to put an end to it as soon as possible.

そういうことは、あなたちのためにも、早くやめなければいけませんね。

His asperity struck Shingo as most odd.

信吾は魚屋の口調がひどく意外で、

they had been the clearest image in his mind when he woke.

目がさめた時、ざるそばの姿がいちばんはっきり頭にあった。

A most womanly kind of observance, thought Shingo.
女らしい祝いと、信吾は感心した。

she would launch forth on the most improbable topics.
ときどき思いがけないことを言い出したりする。

Kikuko's manner was most ceremonious.
菊子は改まったように坐った。

the mask, most alive when viewed at a proper distance
from the No stage.

能舞台の上の適当な遠さで最も生きて見える面が

Eiko's eyes were most appealing, as if she might be on
the point of tears.

泣き出しそうな可愛い目をした。

But then he decided that that might not be the best thing
to do.

ふとしかし、自分が起きて行つては、工合が悪いと
気がついた。

It was most unlikely that Shuichi's woman would be out
walking.

まさか、修一の女が歩いていることはあるまいが、

You pamper her, and you've done not one single thing
about the most important problem.

あなたは、菊子をただ可愛がるばかりで、肝腎なこ
とを解決しておやりにならないんだから。

Fusako did not know this most famous of poems.
房子はこの人口に膾炙する歌を知らない

It was a most ordinary bowl,
なんでもない茶碗だが、

Watching her drink as if it were the world's most
delicious water, Shingo thought to himself that this year too
spring had come.

いかにもうまそうに水を飲む女の子に、信吾は今年
も春が来たのを感じた。

No one paid the slightest attention to the tow of them,
誰も二人を見ようとしなかった。

Now that Kikuko had said so, that seemed a most likely
possibility.

そう菊子に言われると、そうかもしれないと思って、

上の例文をみて、仁平の言うことも `a most likely
possibility' と思つてくださる方がひとりでもいれば、
わたしは心は人生最大の喜びにうちふるえることで
しょう。

(1994年8/9月号)

実用文と無用文

松坂慶子の『愛の水中花』、おぼえてますか。つい
最近の歌だったような気もするし、ずいぶん昔の歌
だったような気もします。「こゝれーもオ愛、あれも
愛、たぶん愛、きっと愛」。これが本日のテーマソ
ングです。

テーマソングに加え、本論には大命題があります。
真理とは「関係の概念である」と言ったのはカントで
した。ぐうの音も出ないほどの至言です(だからさ、
おねえちゃん。ボクという男の真理に触れたかったら、
ボクと「関係」を結べばいいのね。えっ、興味ない。
あっそ)。わたしはカントの真似をしてこう言いたい。
言葉とは「関係の表現である」と。どうだ。カッコイ
イと思わないか。

お断りしておきますが、以下に述べることは原理論
です。実際にどう応用できるかは知りません。わたし
の原理論にもとづき、証券等の売買をおこない、損失

が出て、責任は負いません。

さて、今回は最終回です。

「川端の文体で実用文が書けるかという文句も予想
されるが、その問題については機会を改めて論じる」
と、2回目のときに約束しました。わたしは約束を守
る男なのです。

川端の文体で実用文が書けるか。結論、たぶん書け
ないし、書く必要もないでしょう。書くと、実用に供
さないおそれがあります。

そこで、実用文とは何かを考えてみる必要が出てき
ます。文章には、実用文と無用文があります。無用
文? 聞いたことないぞ、そんな言葉。ゴメンナサイ、
わたしの造語です。ほんとうは閑文字という言葉があ
るのですが、近頃あんまり流行りません。それに、実
用文に対比するのに、無用文のほうがスッキリします。

反対概念をもちだすと、本質がよく見えてくるというのは、世間によくあることです。生がよくわからない時には、死を考えればいいというのと、同じカラクリです。

なぜ、無用文などというものが、この世にあるのか、怪しむ人もあるかもしれませんが。無用などということに耐えられない方もいるかもしれませんが。しかし、考えてみてください。あなたは、本来、無用なのです。怒らないでください。生命というのは、本来、過剰なものだという意味です。

(1) 実用文、(2) 無用文をこう言い換えると、イメージが俄然、鮮明になってきます。

- (1) 手段
- (2) 目的

実用文というのは手段です。それを使って、何かをしようというわけです。目的は他にあります。マニュアルを例に出せば、それ以上説明する必要はないでしょう。

無用文は読むことが目的です。読んで、それで終わりです。それ以外に目的はありません。詩を例に出せば、それ以上説明する必要はないでしょう。

実用文は手段なので、わからなければ意味がありません。「わかること」が最大の目標です。それに対して、無用文はそれ自体が目的なので、わかることではなく、「体験すること」が最大の目標です。「ひと夏の体験」のすばらしさは、その意味を理解することではありません。「きみたちには、愛というものがわかっていない」とお説教する人は、もう「ひと夏の体験」ができなくなったカアイソーな人たちののです。

こう言い換えることもできます。

- (1) 理知
- (2) 情感

あるいは、

- (1) 幸福
- (2) 快樂

幸福とは存続の謂であり、快樂とは破滅の謂であると喝破したのは、天才少年、仁平和夫でした。

両者は互いに馬鹿にしあっています。憎みあってさえます。ところが、血みどろの争いはめったに起きません。明確な境界があるわけではなく、その間に茫洋とグレーゾーンが広がっているからです。なぜ、グレーゾーンができたかということ、馬鹿にしあい、憎みあいながら、(1)と(2)の世界はどこか引かれあっている

からです。ののしりあいながら、色目を使っているのです。その意味で、グレーゾーンは、社会の安全弁、緩衝地帯ということもできます。

(1)の世界の人が、(2)の世界をひやかしに来たり、(2)の世界の人が、(1)の世界に出稼ぎに行ったりしているのです。つまり、文化の交流はあるわけです。しかし、鳥が塙に帰るように、いずれは、お里が知れることになるようです。この二つの世界を悠々と道・できた人は、わたしの知るかぎり、森鷗外しかいません。あとは無理して頭をしぼっても、大田南畝ぐらいしか浮かんでできません。

翻訳レベルでいうと、こうなります。

- (1) 村田蔵六の翻訳
- (2) 上田敏の翻訳

村田蔵六って、だあれ？ 村田英雄のおとうさん？ ちゃう、ちゃう。大村益次郎のことやねん。おまえなあ、実用文の翻訳をやってるんなら、司馬遼太郎の『花神』ぐらい読んでないとあかんぜよ。

上田敏って、だあれ？ むかし銀座でよく怒鳴ってた迫力あるおじいちゃん？ ちゃう、ちゃう。あれは赤尾敏。おまえなあ、無用文の翻訳をやってるんなら、『海潮音』ぐらい読んでないとあかんぜよ。

話は遠回りしましたが、川端の文体では実用文は書けない、あるいは書いてはいけないということが、おわかりいただけたと思います。川端の日本語は、(2)の世界の日本語なのです。(1)は、意味がすべてです。(2)は、意味は二の次、三の次です。(1)は、必要なことを書き漏らしてはいけません。(2)は、すべてを言ってしまうてはいけません。場合によっては、いちばん大切なことを言っははいけません。(1)の命は達意、(2)の命は余韻にあります。

極論を言うと、実用文はかならずしも日本語で書く必要はありません。出生の秘密をばらしてしまうと、日本では昔、公文書(実用文)はすべて漢文、つまり外国語で書いていたのです。言葉である必要さえありません。図表でも記号でもいいのです。要するに、わかればいいのです。もちろん、実用文にも美しさは求められます。機能的な美しさ、効率的な美しさと言うのでしょうか。わたしが、実用文の中でいちばん美しいと思うのは、競馬の出馬表です。奥さん、奥さん。日経新聞なんて開いたって、出てません。土曜か日曜にスポーツ新聞を買ってください。

実用文翻訳の究極のゴールは、スポーツ新聞を見ていただくとして、無用文翻訳の究極のゴールを、

ちょっとだけ紹介しておきます。ちょっとだけよお。

Voice venir les temps ou vibrant sur sa tige
Chaque fleur s'évapore ainsi qu'un encensoir;
Les sons et les parfums tournent dans l'air du soir,
Valse mélancolique et langoureux vertige !

時こそ今は水枝さす、こぬれに花の顫ふころ。
花は薫じて追風に、不断の香の炉に似たり。
匂も音も夕空に、とうとうたたり、とうたたり、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈(くるめき)よ。

翻訳をやっていると、「もっと日本語らしく書け」とよく言われます。「もっと女の子らしく」とか「もっと中学生らしく」とか言われて、「うっせーなあ。なんにもわかつちやいねえくせに」と、足をぐあつと開くスケバンの気持ちがよくわかります。

しかし、何年か翻訳をやっていると、なんにもわかつちやいなかったのは、こっちの方だったと気がつくのです。「日本語らしさ」というヴィーナスはいなかった。業界の数だけ、「日本語らしさ」があったの

です。ある業界で商いをしようと思うなら、その業界の言葉や礼儀作法を覚えなくてはいけない。いかにも業界の人間らしく振る舞わなくてはならない。当たり前のことです。「らしく」を通り越して、「くさく」なってくると、もう一人前です。

わたしの訳文に苦情のあるお客さんは、「もっと日本語らしく書け」などと言わず、「もっと業界くさく書け」あるいは単純に「もっとうまく書け」と言ってくだされば、わたしはもっと早く目が醒めたのです。

川端の『山の音』を持ち出したのは、あなたが信じている「日本語らしさ」は、あなたの業界の「日本語らしさ」にすぎないことを言いたかったからです。

わたしが大学に入ったのは1970年で、学校に行くと毎日、「断固粉碎！」のシュプレヒコールが聞こえていました。そのとき思ったわけではありませんが、はなはだ日本語らしくありません。なぜ、「こなごなにするぞかし」と言わないのでしょうか。

「こおれーもオ日本語、あれも日本語、たぶん日本語、きっと日本語」(1994年10月号)

日本語の不思議

私がこれまで繰り返しわめいてきたことは、要するに「英語と日本語は違う」ということで、主にテクニカルな面に的を絞ってきた。そのほうが俗耳に入りやすいし、こっちも頭をあまり使わなくて済むからである。ファンダメンタルな問題は慎重に避けてきた。もったいぶって後に残しておいたわけではなく、正直なところ、それを論じるのが面倒くさいのである。頭をたくさん使わなければならないし、こんなことを言って、いったい何になるのかという徒労感が先に立つ。

しかし、テクニカルな問題はあらかじめ種切れになったので、いよいよ、ファンダメンタルな問題を考えざるをえなくなった。

いままで書いてきたテクニカルなことは、どう処理しようか、日本語が不細工になるというだけで、命には別状ない。まあ、笑っていれば済む問題である。ところが、笑ってはられない問題がある。それは、こういうことだ。

英語は言葉を重ねて、像を鮮明にしていく、あるいは意味を緻密にしていく。ところが日本語は、言葉を重ねるほど、像がぼやけ、意味がチンプンカンプンになる。まさかと、信じない人が多いけど。

テオドール・ドライザーの『アメリカの悲劇』にこんな一節がある。

His troubled and then suddenly distorted and fulgurous, yet weak even unbalanced - - a face of a sudden, instead of angry, ferocious, demonic - - confused and all but meaningless in its registration of a balanced combat between fear and a hurried and restless and yet self-repressed desire to do - - to do - - to do - - yet temporarily unbreakable here and here - a static between a powerfull compulsion to do and yet not to do.

これを逐語的に訳すとどうなるか。

彼の困惑した、そうしてそれから突然に歪められ、閃々と輝いているところの、だが弱々しく、そうして平衡をさえ失っている顔 - - 急に変わった或一つの顔、憤怒にみちた、猛悪な、悪魔的なというのではなくて - - 慌しい、胸騒がしい、だがじっと抑えつけられている - - だが時も時とて打ち克ち難いところの - - やっちまえ - - やっちまえ - - やっちまえという欲望と恐怖の間の、決定しがたい相剋を示しつつほとんど無表情になった、そうして混乱した顔 - - やろう、いやよそう、という意味が恐ろしい迫り持ちになった静止状態。

訳したのは、私ではない。谷崎潤一郎である。もち

ろん谷崎は、英語をそのまま日本語に置き換えると、
どういう悲惨なことになるかを示すため、つまり啓蒙
のために訳してみたので、谷崎訳『アメリカの悲劇』
なんて本が出版されているわけではない。

さて、上の訳文を読んだ読者は、彼(クライド)の
顔を鮮明に思い浮かべられたらどうか。できるわけは
ない。英語では意味をもっていた言葉が、日本語に
なった途端、意味を失い、ただ屍を並べているだけだ
である。人間には危険をすばやく察知する本能とともに、
無意味なことをすばやく察知する本能がある。ごく普
通の日本人なら、すこし読んだところで、心のドアを
さっと閉ざして、あとはただ、目が活字の上を滑って
いく。氷の上をローラースケートで滑るように。
読み終えて、ああ、この男は迷っているんだなという
ことぐらいは分かるが、肝心の顔はいっこうに像を結
ばない。のっぺらぼうのままである。

上の訳文はひどすぎる、逐語訳に過ぎると言う意見
もあろう。たしかに、センテンスをいくつかに分け、
言葉の順番を変えれば、少しは読みやすくなるだろう。
しかし、少しは読みやすくなるというだけの話であっ
て、英語と同じ数だけ形容詞を使えば、クライドの顔
は絶対に、深い霧の中から浮かび上がってくることは
ない。腕に覚えのある方は、ぜひともお試しあれ。

世の中で一番根性のある人というか、一番辛抱強い
人といえば、なんととっても、ブルーストの『失われ
た時を求めて』を日本語訳で通読した人だろう。ほと
んど頭に入ってこない文字を何巻も何巻も読み進めて
いく苦行は、並大抵の信仰心ではできない。

ちかごろは、ブルーストとブルタークとプリンの区
別がつかない人もいるようだから、1センテンスだけ
紹介しよう。1センテンスだけよ。

そして、一日のさまざまな時刻から集まって
きたかのように、異なった向きからはいつてくるそ
うしたさまざまな明かりは、壁の角をなくしてしま
い、ガラス戸棚にうつる波打ち際の反射と並んで、
筆筒の上に、野道の草花を束ねたような色どりの美
しい休憩祭壇を置き、いまにも再び飛び立とうとす
る光線の、ふるえながらたたまった温かい翼を、内
壁にそっとやすませ、太陽が葡萄蔓のからんだよう
に縁取っている小さい中庭の窓のまえの、田舎風の
四角な絨毯を温泉風呂のように温かくし、肘掛け椅
子からその花模様をちらした絹をはがしたり飾り紐
を取りはずしたりするように見せながら、家具の装
飾の魅力や複雑さを却って増すのであるが、丁度そ
んな時刻に、散歩の支度の着替えのまえに一寸横切
るその部屋は、外光のさまざまな色合を分解するブ
リズムのようでもあり、私の味わおうとしているそ
の日の甘い花の蜜が、酔わすような香気を放ちなが
ら、溶解し、飛び散るのがまざまざと目に見える蜜
蜂の巣のようでもあり、銀の光線と薔薇の花びらと
のふるえおののく鼓動のなかに溶け入ろうとしてい
る希望の花園のようでもあった。

(『花咲く乙女たち』井上究一郎訳)

さて、みなさん、目を閉じて、これがどんな部屋
だったか、どんな光が差し込んでいたか、頭をふりし
ぼって、全力で思い出してみてください。思い出した
言葉をつぶやいてみてください。(1995年8/9月号)

英語と日本語のリアリティ

「腹を抱えて笑う」と「ぷっと吹き出す」

私はいやというほど会社のパンフレットの類を翻訳
したことがあるが、いつも虚しい思いをした。誰も読
まない文字を綴っていることほど虚しいことはない。

「弊社は将来に目を向け、たえずイノベーションに
取り組み、クリエイティブな思考を大切に、環境に
やさしく、地域社会とともに発展していくビジョンを
掲げ、社員ひとりひとりの起業家精神が発揮される自
由な職場環境をつくり、他社には真似のできない製品
ラインを持ち、市場シェアの拡大よりも収益性の向上
に重点をおき」

こんなものを読まされて、なんて素晴らしい会社な
んだろうと、感激に胸をふるわせる人はいない。よほ
どのトンマは別にして

そこでふと考えるのだが、英語圏の人たちは、こう

いう文書を作る会社に好感をもつのだろうか。たぶん、
もつのだろう。少なくとも、そう悪い会社ではないと
判断するのだろう。そうとしか考えようがない。

暇つぶしに米紙の classified ads をながめていると、
「男性のルームメイト求む。当方、経済的に自立した
知性と教養のある 35 歳の美女」なんてのは少しも珍
しくない。日本だったら、デートクラブの広告かと思
われる。

「very はすべて無視しちゃおう」という提言は、も
ちろん無視されたが、私が言いたいことは、とどのつ
まり、very を訳すと日本語のリアリティが失われ、英
語では very をつけないとリアリティが失われるとい

うことだった。

「ぶっと吹き出す」というのが、split its sides with laughing" と英訳されているのを見て、なるほどと思った。split ..." というイディオムは、どの辞書を見ても「腹をかかえて(よじって)笑う」と書いてある。「爆笑する」という訳語をのせている辞書もある。英語では腹をかかえて笑わないとリアリティがなく、日本語では大声を出して笑ったらリアリティがなくなるという場面がある。

「原文に忠実に」とよく言われるが、英語をそのまま日本語に並べ替えて、原文のリアリティが失われてしまえば、それはやはり翻訳の失敗と言わざるをえない。

椎名誠『岳物語』の英訳(フレデリック・L・ショット訳)を読んでいると、なるほど英語とはこういう言葉かとよくわかる。

割合よくわかるような気がした。
I had a pretty good idea of what ...

それとないそぶりで、
act as normal as possible

これはすこし驚きだった。
That was quite a surprise.

そこそこの獲物を仕留めているらしかった。
He apparently caught quite a lot.

満足気な顔で、
with an expression of immense satisfaction

いいねえ。
That's a great idea.

声は弾んでいた。
His voice was awfully excited.

私も真剣である。
I was going to be very, very careful this time.

電話連絡さえなかなかできない。
It was extremely difficult to telephone.

私は野田さんの友情に感謝しつつ、
with a deep sense of gratitude of his friendship

ほんの少しでも客観的にとらえることができそうな気がした。

I felt that I was able to get a much more objective grasp on ...

向田邦子『思い出トランプ』アダム・カバット訳か

らも少々。

そのうちきっとよくなるわよ。

There's not a doubt in my mind that you'll be completely well before you know it.

タカは長いこと立っていた。

Taka used to stand for the longest time.

何年も前からそうしている。

He'd been doing this all his life.

この気持ちは覚えがあった。

Actually this feeling was not so very new to him.

上機嫌

in a particularly good mood

原文がどうなっているかを「読む」。その「読み」しだいで、翻訳の勝負はあらかじめたつてしまう。あらかじめたつてしまうが、その勝負を「決める」のは表現力である。

そこで翻訳者は、おぞましいジレンマに陥る。

「文筆家は外国語を学んではいけない。母国語の感覚が鈍くなるから」というニーチェの教えは重い。翻訳者にとって、ずしりと重い。

森鷗外と独語、夏目漱石と英語、石川淳と仏語、吉田健一と英・仏語といった関係は、強力な反証材料ではある。だけど、これは特異な才能の持ち主に限るといっても、かなりの説得力がある。(1996年10月号)

市場原理に任せて何が悪い!
経済学の正しい使用法
政府は経済に手を出すな

ロバート・J・バロー 仁平和夫訳 定価(本体1600円+税)

日経ビジネス人文庫

ウエルチリーダーシップ・31の秘訣

ロバート・スレーター 仁平和夫訳 定価(本体600円+税)

10秒間@マネジャー

インターネットスピードで経営するための7つの心得

マーク・ブライヤー

アーミン・A・プロット 仁平和夫訳 定価(本体1300円+税)

日本経済新聞社

〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5 電話 03-5255-2827
<http://www.nikkei.co.jp/pub/> *本体価格には消費税がのりかかります。

こぶしだらけを啜う

「こぶし」がなければ、演歌じゃない。しかし、「こぶし」には、きかせどころというものがある。カラオケ・バーに行くと、シロートの悲しさか、全編こぶしだらけでうなっているヤツがいる。当局はこぶし取り締りを強化し、こういう手合いがいたら、即刻、「こぶし過剰陳列罪」で逮捕してもらいたい。

目を閉じ、身体をくねらせて歌う「こぶし陶醉患者」をわらってばかりもいられない。実は、文章も同じなのだ。

過日、旅に出るとき、待ち時間とフライト時間をうっちゃるために、翻訳されたミステリーの文庫を3冊持って行った。さいわい時間つぶしにはなったが、こぶしだらけの訳文には辟易した。ひとさまのことを、わらってはられない。たぶん、自分の訳文も大同小異だろう。好き勝手に書くときは、そうはならないのに、翻訳するとなると、なぜかそうになってしまう。

いや、「なぜか」ではなく、原因ははっきりわかっている。わかっているけれど、口には出せないということ、世間にはありますよね。どの稼業でも、慣行には逆らえない。まあ、もったいぶらずに思い切って言ってしまうと、「英語と日本語は違う」というのが原因です。ミもフタもない言い方で、ゴメンナサイ。真実とはいつも、ミもフタもないものなんです。構文も表現もリズムも違う。それをそのまま日本語に移すと、こぶしだらけのクサーイ演歌になっちゃうってわけ。

それならば、どうすればいいか。傾向と対策はあるのか。ありませぬ。最終的には、文章を書く人のセンスの問題になるけれど、マニュアル化できる部分もある。その前に、翻訳者たるもの、腹をくくる必要がある。「訳抜けです」と言われたとき、おたおたしないだけの確信犯の覚悟が必要になる。その覚悟を固めるだけでも、ずいぶん灰汁ぬきができる。

さて、以下はわたしの提言です。

(1) very はすべて無視しちゃう！

日本語の「長い」を英語にすると「very long」となり、日本語の「大きい」を英語にすると「very big」となるんですね。英語の先生でも知らない人が多いけど。

たとえば、でっかいサメを見たときはなんて言えばいいか。very bigなんて言ったって、誰も話を聞いてくれない。unbelievablyとか、impossiblyとか言っただけで、えっ、どれくらいの大きさだったの

と聞いてもらえる。

ならば、very はまったく無用の措辞かということ、英語にとっては無用ではない。

たとえば、海外のリゾートなんぞに行き、感想を求められて、「いいところですね」と言おうとして、さて、あなたなら何と言うか。たぶん、veryとかhowを使わないと、気持ちを伝えられない。

朝、亭主に「きょうは、早くお帰りになって」と言いたいとき、ホントに早く帰ってきてもらいたいのなら、very earlyと言わなくてはならない。

英語とはそういう言葉である。

(2) 最上級は軽くないぞ！

最上級については、以前一度ふれたので繰り返さない。

She is the most beautiful.は、「絶世の美女」ではなく、「ちょっといい女」である。

(3) how を訳すときは、おさえておさえて

英語を書く人には、how を使うのが好きな人と、そうでない人がある。好きな人に出会ったときは、注意が必要。

ふたたび川端の『山の音』で恐縮だが、サイデンステッカーはhowを使うのが大好き。何十か所出てくるかわからない。もちろん、ほとんどの場合、川端の原文にhowに相当する日本語は見当たらない。例外をあげてみよう。

I don't care how a wife she is, she isn't a war widow.
いくらいい奥さまでも、夫に戦死されたことがないから。

It's remarkable how we go on year after year, doing the same old things.

よくまあ何十年も、同じことをくりかえして来たものだ。

I don't like watching him with Kinu, but I couldn't be gealous of his wife. I don't care how close they might seem to be.

絹子さんとふざけていらっしやるのを見ると、いやな気がしますがけれど、奥さまでしたら、どんなに仲良くなさっても、私だってやきませんわ。

「いくら」「よくまあ」「どんなに」と、ぐっと力

が入っているのがおわかりでしょう。「こぶし」のきかせどころというやつです。

See how the plums are blooming.
よく梅が咲いてますわ。

こぶしのきかせどころでないかぎり、これが限界である。ここで踏みとどまるのが、翻訳の正しい道である。

(4) have to の訳出が腕のみせどころ

訳書を読んでいて、「すべき」「ねばならぬ」の連発にオエーッとすることが少なくない。バカヤロ、田舎代議士の演説じゃあるまいし。

You have to look at it whether you want to or not.
いやでも見える。

Do parent have to be responsible for ever for their children's marriages ?

そういつまでも、親が子供の夫婦生活に責任が持てるものかね。

I imagine it isn't easy to have to see Shuichi.
修一に会うのが、つらいのじゃないか。

If Shuichi hears about this, I'll have to leave the office.
I'll have to ask to be let go.

修一さんにこんなことが知れましたら、私は会社へ出られませんから、やめさせていただきますわ。

If you insist on making fun of me, I'll have to refuse to go dancing with you.

おからかいになると、踊ってさしあげませんわ。

(5) クサイ言葉はどんどん飛ばしちゃおう！

in fact が訳抜けかどうかをめぐって、お客さんと大論争をしたことがある。

「実際とか事実とかいう意味でしょう」

「いいえ、この場合は違います」

「だって、英語にはちゃんと in fact と書いてあるじゃありませんか」

「英語のリズムでは、それがどうしても必要になるんです」

「それならそのリズムを訳文にも活かしてください」

「英語と日本語のリズムは違うんです」

わたしは、in fact と indeed の訳出が絶対に必要な特殊なケースを集めている。機会があれば、その例文集を公開します。

川端の『山の音』には姿かたちもなく、サイデンステッカーの英訳に忽然と現れる語句を拾ってみた(ただし、2回以上のものに限る。*は常連。は100%)。

| | |
|------------|------------------|
| * actually | * in fact |
| after all | of course |
| almost | * oneself |
| * already | * particular(ly) |
| always | * really |
| at least | somehow |
| certain | somewhat |
| evidently | * still |
| exactly | suddenly |
| * how | very |
| * indeed | wholly |

この拙文を preview として某英語教師に見せたところ、『山の音』一冊で、鬼の首でも取ったような顔をするなどお叱りを受けた。カンの悪い人って、いるのよねえ。うん、いるいる。一冊調べれば十分ではないか。言葉というものは、個人が勝手に使えるものじゃないんだから。しかしまあ、読者の声も少しは尊重しないとね。本屋を覗くと、私の大好きな椎名誠『岳物語』の英訳があったので、買ってきた。訳した人の名前は、Frederik L. Schodt.

この『Gaku Stories』を開き、誠心誠意かつ一心不乱もしくは酒池肉林に調査を行なった結果、私の予想どおり、いや確信どおり、上のリストから一語も削除する必要のないことが判明した。それどころか、追加しなければならなくなった。

| |
|----------------------------|
| * as it is |
| * as far as I know |
| * as far as I am concerned |
| * as it turned out |
| * come to think of it |

(6) 言葉を補って、日本語のリズムをつくらう！

言葉のリズムとは、間(ま)である。間がないと、文章は読めない。間をつくれぬ人を「まぬけ」という。歌曲や話芸なら、息をついだり、黙ったりして、間をつくれる。文章はそれができない。どうすればいいか。意味もない言葉を書けばいいのである。原文にそんな言葉がないときは、どうするか。つくればいい。

英語を書くとき、(5)のリストにあげた語句を巧みに使う必要があるのも、同じ理由からである。

いま、毎日一時間とって(やらない日もけっこう多いけど)、『ニードフル・シングス』を、S・キングの原文と芝山幹郎さんの訳文を読み比べている。芝山

さんの間の取り方には舌を巻く。絶妙の呼吸である。わたしは、うーんとうなって、しばしば天をあおぎ、このため、なかなか先に進まない（念のために言うておくと、原文にない言葉を勝手に作っているという意味ではない）。

サイデンステッカーの偉業は、英語のリズムで川端作品を訳したことである。そのために、原文にない言葉を補い、原文にある言葉を削った。日本語の構文を壊し、再三再四、順序をひっくりかえした。複数のセンテンスを1つのセンテンスにまとめ、1つのセンテ

ンスをいくつかのセンテンスに分けた。そんなこと、あたりまえでしょう。

わたしが言いたいことはただひとつ。こぶしのオンパレードは品がない。文章のうつくしさは、究極のところ、品で決まる（人間もそうだけど）。わたしはつねに「品」を心掛けて文章を書いている。えっ、仁平の文章は下品で読めないって？ わかってねえなあ。王子には王子の品があり、乞食には乞食の品があるのだ。

(1995年3月号)

文章の寿命

次の二つの文章をじっくり読み比べてください。

(A)

娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は子供だから上手だから下手だからで解らなかつたけれども、私の宅（うち）の玄関から表へ出る敷石の上に立って、通りへでも行こうとすると、御北さんの声がそこからよく聞こえたのである。春の日の午過（ひるすぎ）などに、私はよく恍惚（うっとり）とした魂を、うららかな光に包みながら、御北さんのおさらいを聴くでもなし聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身をもたせて、佇んでいたことがある。そのおかげで私はとうとう「旅の衣は鈴懸の」などという文句をいつのまにか覚えてしまった。

(B)

ニューギニア島およびソロモン群島の各要線に戦略的根拠の設定を援護すべく、寡兵よく敵大軍の真っ只中に挺進し、勇敢奮闘に及ぶこと約半年にわたり、言語に絶する困苦欠乏に耐え、皇軍伝統の精神を真骨頂にまで発揮した我が精鋭は、いまや後方における戦略的根拠の設定も終了し、所期の目的を達したので、ニューギニア島のブナ付近に挺進せる部隊は一月下旬、ソロモン群島ガタルカナル島に作戦中の部隊は二月上旬、それぞれ数多戦友の血を流した思い出多き戦場に名残りを惜しみつつも、極めて整齊確実に戦略的転進を完了した。

〔いまだきの人のために、一語だけ翻訳しておく「戦略的転進」というのは、「大敗北」の意味である〕

(A)は夏目漱石の『硝子戸の中』

(B)は朝日新聞、昭和18年2月10日朝刊

漱石というのは「ふるーいやつ」である。どれくら

い古いかというと、ヴィクトリア女王の葬列がハイド・パーク・コーナーを通り過ぎるのをその眼で見た、というくらい古い。生まれは、なんと慶応3年、1867年である。

同じ年に生まれた文学者に、尾崎紅葉と幸田露伴がいる。ええーっ。信じられな一い。紅葉が書いたものなど、漱石より1世紀は古いという感じがする。私は露伴が好きだけど、漱石と並べれば、どう鼻屑目に見ても、露伴は古い。同時代とは思えない。

なぜ、漱石は古びないのか。いつまでも瑞々しいのか。理由はいろいろあるだろう。江藤淳は、その第一の理由として、「漱石の文学が、他の近代作家たちが切り落とそうとした過去に深く根ざしている」事実をあげている。なるほど。そう思って、読み比べてみると、

(A)はほとんど古い言葉を使っている、

(B)はほとんど新しい言葉、当時最新流行の言葉を使っている。

新しい言葉を使うな、古い言葉を使えというのは、文章作法として昔から口やかましく言われてきたことではある。漢語を使うな、大和言葉を使えと言う人もいる。しかし、ことはそれほど単純ではない。大和言葉さえ使えば、鮮度を保てるというのなら、なぜ、いま、洒落本や滑稽本はもっと読まれないのか。

やはり、「近代の洗礼」という問題を考えてみなければならぬ。『硝子戸の中』が江戸の言葉を使っているからといっても、洒落本や滑稽本とは明らかに違う。たとえば、『夢十夜』などは、近代にならなければ、絶対に書けない文章である。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑らかな縁の鋭い貝であった。土を

すくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂いもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそっと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。(第一夜)

日本語はものすごいスピードで変わったとよく言われるが、ほぼ百年近く、なにも変わっていないじゃないかと驚嘆する(『夢十夜』の発表は明治41年)。と同時に、その百年の間に書かれた文章のうち、99%以上がすでに読むに耐えなくなったことも事実なのである。

漱石の瑞々しさと比較するのに、私が(B)を選んだことに不満の向きもあるでしょうね。あれは、戦時中という特殊事情があったのだからと。しかし、考えてもみてください。特殊事情のない時代など、

あったためしはないのです。漱石が生きた時代に、特殊事情は山ほどあった。ならば、現在の特殊事情とは何か。それは、カタカナやひらがなをたくさんつかわなければならないというとしゅじじょうである。

50年後にも読むに耐える文章を書く。そんなことは翻訳者に求められていない。しかし、私たちがいま書いている文章が、50年後には(B)と同じ運命をたどるのだということぐらいは自覚しておいていい。

漱石の「永遠の生命」の謎は、じっくり考えてみるだけの価値がある(漱石が後世の知識人に与えた悪影響はまた別の問題)。漱石は抜群に「耳がよかった」。漢籍の教養が寄席の教養で裏打ちされていた。

(1995年10月号)

漢字のこと、ルビのこと

わたしは手紙はかならず手書きで書くようにしているが、困るのは使いたい漢字がすぐに出てこないことである。子供の頃におぼえた漢字の半分以上は忘れてしまったような気がする。

子供のころ、鏡花を夢中になって読んでいたのは、漢字の使い方とルビの使い方が好きだったからだ。「洋傘〔こうもり〕」「日南〔ひなた〕」「待草臥〔まちくたび〕れて」、「魔が魅〔さ〕す」なんてのが好きだった。

作文を書くときは、どこで待草臥れようか、どこで魔が魅そうかと、必死で考えたものである。それで首尾よく筋書き整って、名文を書き上げると、もちろん、その箇所には赤が入れられて戻ってくる。「仁平くん、そんな漢字は使いません」。そんなことを言う国語教師をどんな目でながめたか、自分ではわからないが、たぶん、ツメターイ目でちらっと見て、ふっと笑っていたような気がする。いやなガキだね。

漢字とひらがなとカタカナを混ぜて書くというのは、世界文明史上、他に類がない大発明で、漢字にルビを振るというのも、それに劣らぬ大発明だった。

漢字をできるだけ使わないようにするというのは、弁慶が七つ道具を質に入れてしまうような話である。漢字を使えば、イメージも意味も鮮明になるのに、あたらそれを捨ててしまうのは、なんとももったいない。私はひらがなカタカナだらけの文章を「ふにゃちん」文章と呼んでいる。

たとえば、

「柳はほんのりと萌〔も〕え、花はふっくりと蒼〔つぼ〕んだ」と書けば、まさに春が匂うが、これがひらがなではどうにもならない。

「じとじと降りの雨だったのが、花の開くように霽〔あが〕った、彼岸前の日曜の朝」

「霽った」と書くのと「あがった」と書くのでは、目に沁みる空の青さが全然ちがう。

渾水たらした婆さんなら「目を見張った」でもいいが、妙齡のご婦人には是非とも「目を〔みは〕って」ほしいものである。と書こうとして、私の馬鹿ワープロにはの文字が登録されていない。やれやれ。「目+争」という字です。

「いまどき、そんな漢字は使いません」とよく言われる。たしかに、婀娜〔あだ〕なおねえさんがいなくなり、兄哥〔あにい〕と呼びかけたくなるおにいさんがいなくなったんだから、婀娜も兄哥も使いようがない。それで世の中にイイ女とイイ男が絶滅したわけではないから、別段問題はない。

しかし、わたしが独裁者なら、「う回」「ひっ迫」「補てん」なんて書くヤツは、極刑に処すね。

そして、漢字が多いと読者が減るという説は、にわかには信じがたい(なにごと程度の問題ではあるが)。

わたしの姪が小学生のころ、こんなことがあった。家に遊びに来て、ソファァーに寝ころんで文庫本を読んでいる。「ご飯だよ」と言っても、なかなか起き上が

らない。本をひったくると、菊池なにがしの『吸血鬼なんか』であった。中を見てびっくりした。漢字だらけなのである。

「むずかしくない？」

「ぜんぜーん。超オモシロイよ」

「読めない漢字があるでしょ？」

「あるよ。でも、だいたい意味はわかるよ。それに、わからないところは飛ばして読めばいいじゃん」

奥付を見たら、30何刷とあった。

ちなみに姪は、本を読むのが好きというわけではない。芸能界情報にめっぽう強い、バレーボール部員である。

みんな、子供の頃に自分が何を読んでいたか忘れているのである。それで、いまの子供、つまり自分の息子や娘は馬鹿だと決めつけている。

「ふにゃちん」トレンドはとどまるところを知らないかということ、やはり少しは揺り戻しがあるようで、最近、漢字をたくさん使う若い人も出てきた（京極夏彦など）。

最近、谷沢永一『人間通』（新潮選書）を読んでい

て、長い間忘れていたルビのことを思い出した。鏡花のルビは、漢字の映像効果と仮名の音響効果を、あてやかに匂いたたせるものだった。谷沢のルビの使い方はかなり違う。なんと云えばいいのかわかり、見識・諧謔・洒脱のルビ法とでも命名すべきか。

流れの中にある言葉を、前後から切り離して取り出すというのは乱暴な話だけど、長い引用は煩わしいので、無理を承知で、谷沢流ルビのベストテンを選んでみた（順不同）。

無能〔すかたん〕

自惚屋〔ロマンチスト〕

真実〔ほんまもん〕

教理〔イデオロギー〕

虚喝〔はったり〕

穿鑿、玩弄〔がくもん〕

見識展示会〔ファッションショー〕

無言〔ツーカー〕

活躍人〔タレント〕

宣伝屋〔チンドンヤ〕

(1996年4/5月号)

繰り返し

Never, never, never, never give up.

チャーチルの有名な言葉である。

「絶対、絶対、絶対、絶対、あきらめるな」

こう訳すと、受験浪人の新年の抱負としてはいいかもしれないが、大英帝国の残照を背にして立つ老獪な宰相の言葉とは思えない。

「重ねて重ねて、何度でも誓う。あなたがたの夫や息子を戦場に送ることは絶対にない」

歴史に残るルーズベルトの不戦宣言である。いま手元に原文がないのが残念だが、いかにもアメリカ大統領の演説だという気がする。

英語は同じ単語を繰り返しやすい。名手がこの手法を使うと、すばらしい効果が出る。しかし、日本語は同じ言葉を繰り返すと、滑稽になる。

ヘミングウェイの『老人と海』。ようやく大物が食いついたシーン。

He was happy feeling the gentle pulling and then he felt something hard and unbelievably heavy. It was the weight of the fish and he let the line slip down, down, down ...

福田恆存先生はこれを「老人は綱をどんどん伸ばしていった」と訳している。一匹も釣れない日が八十四日も続いたあとにしては、ちょっと物足りない感じもするけれど、しかしまあ、「どんどんどん」と訳すわ

けにはいかない。

滑稽狙いでなければ、日本語の繰り返しは2回が限度だという気がする。できるなら違う言葉を並べたほうが、強調の効果がある。「二度とふたたび」とか、「黙れ！うるせえ！」とか。

「布施するぞ、布施するぞ、布施するぞ」っていうものあるけど、あれは別な狙いであって、文章作法とは次元が違う。

信長は怒った。「たわけ！」

信長は怒った。「ばか、ばか、ばか」

違う言葉を並べるのは、ルール違反だけど、対照を際立たせようと思っただけで、同じ言葉を使っても事情は変わらないわけ！。

「たわけ！たわけ！」

とても本気で怒っているとは思えない。

(1995年10月号)

パラダイム

何冊か本を書いてみようというのが、わたしの老後の楽しみである。もちろん、書きたいと思っているのは埒もないことばかりだから、その時間が残されていなくても、神を恨んだりはない。そういうテーマの1つに、『東大出ほど馬鹿はない』というものがある。なにも出身校で人を差別しようという話ではない。「スゴク頭がいいと世間で思われている人たち」を象徴的に一語で言い表そうとして、「東大出」という言葉を思いついたという、それだけの話である。

太平洋戦争の記録を調べていると、胸がはりさけそうになる。涙があふれて止まらない。戦争に負けたのは仕方がない。工業生産力に彼我の差があり、また、武運拙しということもある。しかし、人間どうせ死ぬんだから、生き方はどうでもいいという話にはならないように、どんな状況でも戦い方というものがある。戦っているのは将棋のコマではなく、生身の人間なのだから。

わたしは「ほとけの仁さん」と呼ばれるくらい温厚な人間で、人さまを傷つけようなどと思ったことはないが、太平洋戦史を読んでみると、まさに殺意をおぼえる。殺してやりたいと思う人間がぞくぞく出てくる。

そのひとりに、辻政信がいる。次から次へと、呆れるくらい馬鹿な作戦を考えだしては、あたら皇軍の屍を野に山に海に累々ときずいた大日本帝国陸軍の参謀である。なぜ、そんな馬鹿なヤツが作戦を担当していたのか。もっと、頭のいい人に作戦を立てさせればいいのに。いえいえ、辻政信という人、「作戦の神様」と呼ばれていたのです。

陸軍幼年学校を二番、陸軍士官学校を首席、陸軍大学校を三番で卒業したスーパー・エリートである。陸軍大学校の卒業席次が五番に入ると、天皇陛下からじきじき軍刀を賜る。いわゆる「恩賜の軍刀組」である。これがどれくらい難しいか、どれくらい死に物狂いで勉強しなければならないか、いまの人にわかってもらうのはむずかしい。戦前の学制を説明しておきたい気もするが、煩瑣になるので省く（ちょっとだけ当時のエリートコースに触れておくと、「おれは本郷（一高・帝国大学）に行く。お前は？」「おれは市ヶ谷（陸士）が江田島（海兵）だ」という会話が旧制中学生の間で交わされていた。その陸士を卒業し任官して数年後、一握りの俊英中の俊英がまなじりを決して集まってくるのが陸軍大学校である）。まあ、恩賜の軍刀組に入るのは、年末のジャンボ宝クジで、一等に当たるより難しいと考えていただいて差し支えない。

さて、この辻政信という人、享楽や贅沢を嫌い、ひ

たすら質実剛健に徹していたというエピソードには事欠かない。カラオケ、ゴルフにうつつを抜かしているあなたの上司とは違うのです。「少尉になって配属された金沢の歩兵第七連隊では、毎日、ほとんどフトンに寝ることはなく、戦術、戦略書の勉強に励んだ。机にもたれ、毛布を頭からかぶって、二、三時間眠るだけである」「エリートの青年将校というので、少なからぬ将官から縁組を申し込まれたが、すべて蹴飛ばし、郵便局長の娘を妻に迎えた」

この人が、作戦立案し（ときには、指揮まがいのこともやり）、あまたの将兵が犬死にした戦は枚挙にいとまがない。およそ作戦とは呼べないような作戦もたくさんあった。代表的なものとして、ガタルカナル攻防戦をあげれば十分だろう。とにかく「断固戦えというのと、卑怯な振る舞いは許さんという」二点張りだった。この二点に反対できる軍人はいない。

捕虜となって送還された将校、自分が立てた作戦を遂行できなかった将校に、自決を迫った話はあまりに有名（実際、何人もの将校が自決している）。ならば、ご本人、戦争に負けたときには、自決したかということ、とんでもない。第十八方面軍参謀としてバンコクで敗戦を迎えたが、戦犯指名をおそれ、タイ僧に変装して逃亡した。1948年、帰国。さぞかし国民の袋叩きにあったかということ、とんでもない。1952年、衆議院議員に当選。1959年には参議院議員にもなっている。

わたしが殺してやらなくても、辻政信はすでにこの世にない。安心、安心とみなさんは思うだろうか。すべては戦争の悲劇と思うだろうか。辻一個のことならば、それで話は終わる。大馬鹿者が突然変異のように現れ、消えていったというのなら、もう忘れたほうがいい昔話である。しかし、辻政信は消えていない。消えるどころか、戦後も一貫して拡大再生産されている。もちろん、今もたくさんいる。亡霊ではない。上は外務省、大蔵省から、下は「ほら、あなたの目の前にいるその人」に至るまで、うようよしている。

「東大出」はそれだけ重い責任を負わされるのだから、凡人に比べ、犯す過ちのスケールも大きくなる。という説にも一理はある。守備要員に打順が回ってきて凡退してもファンは怒らないが、一打逆転の好機に四番打者があえなく三振に倒れれば、罵声を浴びる。しかし、この譬えは、単なる期待度の問題であって、わたしが解きたいと考えている謎のメカニズムとは本質的に関係がない。

第十五軍司令官が、ごくごく普通の人だったならば、インパール作戦など絶対に思いつくはずはなかった。

かりに、そんな作戦を参謀が考えついても、必敗の作戦だと思ったにちがいない。ご存じのとおり、第十五軍十万人は、インド北東部、雨のアラカン山中で飢えと疲れに苦しみ、“白骨街道”の異名そのままに延々と死体の列を残して退却した。“飢島”といわれたガタルカナル島の惨状とならんで、日本人が決して忘れてはならない地獄である。

インパール作戦が正式に認可された 1944 年 1 月、牟田口廉也中将（もちろん、陸士、陸大のエリート）は、第十五軍司令部に記者団を集めてぶちあげた。

「インパールはわけはない。ま、三週間もあれば取れる。が、そのあとがある。インパールなど、それだけじゃ、とつても間尺にあわん。自動車、戦車、大砲も敵さん給与でまずプラマプトラ河に出る。ここ（と地図を指さし）、ここがプラマプトラ河だ。ここでカルカタからのびるベンガル、アッサム鉄道を押さえる。うまくいきゃ、レドも取る。いや、デリーの赤い城壁まで兵を進めるさ。どうじゃ、ハッハッハ」

どこかで聞いたセリフだなと思うでしょう。そう。固有名詞を入れ替えれば、みなさんが仕事のうえでさんざん聞かされている上司のセリフにそっくりです。

もうこんなに頭のいい人はいないと思われる人たちが、どうして、十歳の童子にもわかる道理がわからなくなってしまうのか。勉強をすればするほど、その道の修行を積めば積むほど、馬鹿になっていく。そんな不思議がカラクリがある。この謎を解かないかぎり、日本は救われない。いや、人類は救われない。

この不思議なカラクリに気づき、その謎を解こうとした先人は何人もいる。その答えは、だいたい次の二つに要約できる。ひとつ。学校秀才は役に立たない（答えが出ている問題を解く能力しか試されていないのだから、それ以外の能力が求められる場面で、学校

秀才に力があると思うのは大間違いのコンコンチキ）。ふたつ。成功体験が身を滅ぼす（若い頃に競馬で大穴を当てた人は、さぞ耳が痛いでしょう。織田信長は桶狭間のような戦い方を二度とやらなかった。軍事の天才といわれる所以である）。

以上の二つで、だいたい謎は解かれたようにも思う。しかし、わたしはもうひとつ釈然としない。学校の成績が悪く、たいした成功体験もない自分の人生を振り返ってみると、まさに失敗と悔恨の歴史であることに茫然とするからだ。上の二つだけでは、努力すればするほど、目が見えなくなっていく不思議なカラクリが説明できない。

わたしが言いたいのは、こういうことだ。わたしは、逆説のレトリックとして「東大出」という言葉を選んだにすぎない。三流大学出の人も、高校中退の人もすべからく、この悪魔のカラクリから逃れることはできない。そして、それは多分、理性が足りないからではない。

わたしは、いつか暇をみつけて、とことん考えてみようと思っていた。「よくわからないことがあったら本を書け」という西洋の諺がある。ものを考える最高のトレーニングは文章を書くことである。

しかし、わたしの老後の楽しみは、ひとつ奪われてしまった。このカラクリを、みごとに説明している本があったのだ。書いた人は、ジョエル・アーサー・バーカー。本の題名は『パラダイム』。しかも、わたしは、それを翻訳する幸運にめぐまれた。現在、鋭意翻訳中です。

早くても来年春ごろになるかもしれませんが、本ができたなら、みなさんにお送りします。

(1994 年 11 月号)

仁平翻訳事務所

子供のころ、この世でいちばんカッコイイと思っていたのは「明智探偵事務所」だった。ペーパーバックを読むようになってからは、フィリップ・マロウにあこがれた。いつかきっと、「仁平なんとか事務所」というのをつくってやろう。それが、わたしの夢だった。

二日酔いの頭をガンガンさせながら、事務所に行き、ひがな一日、電話を待っている。ああ、きょうも仕事の依頼はなかったか。神、そらに知るしめす。すべて世は事もなし。そう思って、夕日を眺めながら、グビグビ飲みだす。カッコイイ！

3 年前、会社を辞めて、機は熟したと思った。こきたないビルの一室を借りて、ブルドックのような秘書を雇うのが理想だけど、まあ、おそるべきデフレが予想されるので、借金は禁物だし、固定費はできるかぎりゼロに近づける必要がある。どうせ誰も訪ねて来ないんだから、自宅の一室でもいいや。

わたしは早速、看板を作りに行った。カネをけちったため、墨痕あざやかな看板とはいかず、味気ないネームプレートになった。それでも「仁平翻訳事務所」のプレートを、郵便箱にはりつけたときはうれしかった。

そして、おどろいたことに、看板を出した効果はてきめんだった。仕事が殺到したのではない（予想どおり、仕事は来なかった）。おれにも翻訳をやらせろという人が殺到したのである（殺到というのはオーバーで、5人も来なかったけれど）。

一流企業を定年退職し、いまは悠々自適の生活、あるいは暇との戦いをしている方が多かったように思う。自分は実務経験、海外経験が豊富であり、きわめて優秀なバイリンガルであると、まくしたてる。よくもあんなチンケな看板に目をとめてくださったと感動したが、わたしの答えはいつも同じだった。

「あいにく、仕事がまったくないので。ですから、いくら優秀な方に来ていただいても、やっていただくことが何もありません」

すると、呆れるやら、むっとするやら、こんな売れないヤツを相手にしても仕方がないという顔をして、みなさん、お引き取りくださる。「仕事がない」なんて、体のいい撃退の口実だろうと、買いかぶってくれる人はひとりもいなかった。くやしけれど。

探偵事務所とか、法律事務所とか、そういう看板だったら、おれにも仕事をやらせろなんて、ぶしつけに訪ねてくる人はいないだろうと、ぼんやり考えた。

1年もすると、そんな人はぴったり訪ねてこなくなった。ところが先日、玄関先に、なかなかの美形がすっと立った。「翻訳について、ちょっとお話をうかがいたいんですけど。お忙しかったら、また出直します」

「あ、ちょうどいま、一段落ついたところです。どうぞどうぞ、お上がりください」

ああ、こんなきれいなねえちゃんと話ができるなんて、何年ぶりのことだろう。喉がかわいて、膝がふるえた。

翻訳をやりたいという話ではなく、とりとめもない話がだらだら続いたあと、その人はいきなり、

「翻訳されたものって、ほんとうにつまらないですね」と言いだした。

「え。そうですか。たしかにつまらないものもあるけど、すばらしい翻訳もあるんじゃないんですか」

「いいえ。どれを読んでも、ユーモアがないんです。原文にはユーモアがあふれているのに、翻訳を読むと、それがみんな死んでるの」

「まあ、そのユーモアというのが、いちばん訳すのが難しいところですから」

「ユーモアのセンスのない人が、翻訳という職業を選ぶんじゃないかしら？」

「ええっ」

「だって、日本にも、ユーモアのセンスあふれる作

家やエッセイストがたくさんいるのに、翻訳家になると一人もいないじゃありませんか」

「一人もいないなんてことは」

「旧ソ連の戦車みたいな文章か、さもなければ、カルチャー・センターに通うオバサンみたいな文章ばかり」

「はあ」

「要するに、翻訳家って、みんな教養がないのよ」

「ええっ。でも、教養ってひとくちに言っても。あなたはいったい、教養のある人って、どんなイメージを描いているんですか」

「ピアノが弾けて、ワインの味がわかって、部屋にはちゃんと絵がかかっている」

わたしは、ネコ踏んじやったも弾けないし、2000円以上のワインは買ったことがないし

「ほら、あそこに絵がかかっているでしょ」

「モネ。どうせ偽物でしょ？」

「も、もちろん。ボクは偽物が好きなんだなあ。ははは」

「貧乏たらしいわ」

シュン。

「どんなに貧乏してもいいけど、文章書く人は絶対に貧乏たらしくなるとはいけないのよ」

「はあ。ところで、あの、どういうご用件で？」

「翻訳やる人って、どういう人間なのか、いままで見たことがなくて、それで一度見てみたいと思って」

「はあ、なるほど」

(1994年12月号)

二月の大掃除

このところ不思議に年末から正月にかけて仕事がたてこむ。考えてみると、この数年間、仁平翻訳事務所は大掃除どころか中掃除も小掃除もしていない。そこで先日、一念発起して大掃除を始めた。やり出してみると実におもしろい。おもしろいものが次から次に見つかる。捨てるに忍びないものが3点見つかったので、ここに書き残して永く栄誉を表彰したい。

(1) ドイツ陸軍の戦訓

何年か前、さる翻訳会社で、おそれ多くも畏くも、山岡洋一さんのあとを受けて、八エある翻訳部長を拝命した。苦節何十年の末の昇進なら、ソルマックに感謝しながら、赤提灯で祝杯をあげるところだが、まあ、大相撲でいえば、十両からいきなり大関に上がってしまったような話なのである。相撲の世界で言う「家賃が高い」というヤツだ。

わたしに課せられた任務は、400字詰めで月に600枚翻訳し、さらに1800枚の翻訳原稿をチェックし、さらに、文句を言うお客さんのところへ飛んで行ってペコペコあやまることだった。確かな記憶はないが、このノルマを達成できた月は1回もなかったように思う。12時就寝、5時起床が日課だったが、毎晩なかなか寝つけなかった。

そんな絶望的な日を送っていた頃、電車の中で本を読んでいて、あっと胸が熱くなり、家に帰ってすぐに書き写した文句がある。ワープロの一番でかい字で印刷した。額に入れて飾るつもりだった。しかし、会社にそんな額を飾ったら、あのバーカ、と言われるに決まってる。それで、家の仕事部屋の天井にはりつけた。ボタンキューと倒れた時に、その文字が目飛び込んでくるようにである。

神よ、できないことを
諦める勇気を与えたまえ

神よ、できることを
遂行する勇気を与えたまえ

神よ、できることと
できないことを
分別する知恵を与えたまえ

1年は頑張れるつもりで引き受けた仕事だったが、あえなく半年余りでつぶれてしまった。眼が見えなく

なった。あとで聞いた話では、「仁平のヤツ、日頃でかい口を叩いているくせに、半年ちょっとでプツンしやがった」と、みんなで大笑いしたそうである。

この紙を天井からはがした時の気持ちは、もうよく思い出せない。多分、捨てる気にはなれなかったのだろう。すっかり黄色くなって、ソファの後ろに落ちていた。

(2) 相馬藩大聖寺暁仙僧正為一家繁栄之

偉い坊さんが書いた家訓のようなものである。長い間可愛がってきた女の子が結婚する時、披露宴のスピーチで使い、そのあと、捨てがたい思いがして印刷しておいたのだが、いま読み返しても捨てがたい思いがする。

親父の小言

朝は機嫌よくしろ
人には腹を立てるな
恩には遠くから返せ
人には馬鹿にされている
年忌法事はしろ
働いて儲けて使え
人には貸してやれ
大事覚悟しておけ
泣きごとは言うな
子の言うこと八、九きくな
不吉は言うべからず
義理は欠かすな
貧乏は苦にするな
怪我と災いは恥と思え
小商いもの値切るな
病気は仰山にしる
家内は笑って暮らせ

ひとことひとこと心に沁みる。「病気は仰山にしる」というのは、病気になったら、病魔を見くびらず、しっかり養生しろという意味である。それ以外は解説する必要もないよね。

(3) ポール・モーリアのCD 2枚

いま、それを聴きながら、これを書いている。ギャツとのけぞった方も多いただろう。ああ、ポール・モーリア。大の男が口にはできる名前ではない。音楽の趣味どころか、見識まで疑われかねない。しかし、

何を隠そう。わたしは、ポール・モーリアが好きなのである。

何年前か、三枝成彰さんのエッセーを読んでいて、はたと膝を打った。音楽家には圧倒的に鬱が多く、例外中の例外がハイドンだというのである。なるほど。だから、ハイドンが好きだなんて言えば馬鹿にされるのか。たいていの人は、中学校の音楽室で聴いた記憶しかない。

でも、たとえば、トランペット協奏曲変ホ長調なんて、焼鳥屋で流したってイイと思う。爽快に「ふっきれてる」ところがいい。聴いても聴かなくてもいいところがイイ。明治生まれのおじいちゃんは「まっすぐ」と言うところを「まっつぐ」と言っていたが、ハイドンの音楽は「まっつぐ」である。常に正気である。

ひょっとしたら、モーリアはハイドンかもしれない。誰でも耳にしたことはあるが、本気で聴いたことはない。私はさっそくCDを買い込み、一時期さんざん聴いていた。

モーリアは底が浅いとよく言われるが、わたしに言

わせれば底が抜けている。これを「空虚」と呼んでもいいが、ユーミンや中島みゆきの「空疎」とは、およそレベルが違う。聞くところでは、ユーミンやみゆきは自分のことをアーティストもしくは天才と思っているらしい(笑わせるぜ、ったく)。モーリアは自分のことを芸人と思っていたのではないだろうか。

モーリアの音楽をなんとさえいいたいだろう。低俗を羞じない音楽。心に突き刺さらない音楽。すれ違って、振り返ろうとも思わない音楽。二流ホテルのロビーで流すのに一番いい音楽。別れ話がふと途切れたとき、隙間に入ってきて存在を感じさせない音楽。軽いか、明るいかと言うより、陰影がない。だから聴いたあとに耳に残らない。後味がいいも悪いも、後味というものが無い。このオッサン、ただ者ではない。どんなにクサイ音楽でも、聞き流す音楽に変えてしまった。いつか、モーリアの音楽のような文章を書いてみたい。

(1995年3月号)

「おかあさん」と「おっかさん」

「おかあさん」と「おっかさん」、あなたはどちらが好きですか。

わたしは、自分の母を「おっかさん」と呼んだ記憶はない。小さい頃は「おかあちゃん」と呼び、ものごころがついてからは「ばばあ」と呼び、いまは「おい」とか「きみ」とか呼んでいる(人前では「おふくろ」と呼ぶ)。

「おっかさん」がカッコイイと思うのは、子供のころ見た東映映画で、片岡千恵蔵も、月形龍之介も、中村錦之介も、高倉健も、みんなみんな「おっかさん」と言っていたからだ。「おかあさん」などというセリフをいっさい言わせなかっただけでも、わたしは東映の脚本家を尊敬する。「とめてくれるな、おっかさん」と言うから、背の唐獅子は泣くのである。

日本語には2種類ある。「明治新政府」の言葉と、「熊つあん八つあん」の言葉である。括弧でくくったのは、そういう心性を持った人というほどの意味である。ここで言う「明治新政府」は、維新の大業とは関係がない。なんの志もなく、たんなる保身のために、エスタブリッシュメントにすり寄っていく人のことである。

明治以降、いわゆる標準語ができていく過程は、

「明治新政府」が政治的に「熊つあん八つあん」を弾圧し、文学と芸能が「熊つあん八つあん」の側から、反乱を繰り返してきた歴史だと言ってもいい。「熊つあん八つあん」というと、江戸っ子の臭いがして嫌だというのなら、「方言」「お国ことば」と言い換えてもいい。

むかしむかし、兵隊落語というものがあつた。上等兵が新兵にいろいろ質問し、新兵は懸命に答えるのだが、お国訛りが抜けないうちに話が通じない。そこで、上等兵が怒鳴る。「ヒョウズンゴを使え、ヒョウズンゴを！」

「おかあさん」と「おっかさん」。どちらがいいという話ではない。好みや家風にしたがって、使えいいだけの話だ。ところが、「明治新政府」は「おっかさん」を殺した。国定教科書である。

「おかあさん」がどれだけ広く使われていたかは、さうとう疑問がある。幕末の日本語と英語を対比させたアーネスト・サトウの『会话篇』、ヘボンの『和英語林集成』を見ると、mother に対する日本語として、「はは」「ははさま」「母堂」「御母堂」「おっかさん」「おふくろ」が挙げられているが、「おかあさん」はない。

国定教科書の編纂者はなにを血迷って、「おっかさん」を退けたのか。「おかあさん」を選んだ裏には、「東京でもかなり上流の家庭で使われている上品な言葉」という意識があったのではないか、という説もある。笑わせるぜ。

国定教科書の選り好みぐらいで、言葉が変わるはずはないと言う人は、社会というものがわかっていない。離島出身の女性から、こんな話を聞いたことがある。島では「おとう、おかあ」と呼んでいた。小学生のころ、東京に引っ越してきて、みんなのまえで「おとう」と呼んだら、笑われた。笑われただけならいいが、その後もしつこく、「おとう、おとう」といじめられたという。

夏目漱石は『坊ちゃん』の中で、松山の婆さんに「おかあさん」と言わせ、東京生まれの坊ちゃんに「おっかさん」と言わせている。下谷、浅草で育った漱石が、「おかあさん」などという言い方に我慢ができたことがよくわかる。問題は、松山の婆さんにとって、「おかあさん」がお国言葉ではなかった点だ。媚を売って、そう言っている点である。

「おっかさん」を殺して、日本語がいかに貧しく、卑しくなったか、毎日の新聞をひらけば足りる。日本語がどこまで醜悪になれるかを知りたいければ、テレビの国会中継を見るもよし、そこらの翻訳本を読むもよし。

外国語をなんで、きちんと日本語に翻訳できないか。日本語が貧しいからである。いや、正確にいうと、「明治新政府」の日本語が貧しいからだ。「熊つあん八つあん」の日本語を使うのは、まかりならんと言われるからである。

「明治新政府」とは、要するに官僚のことかというのと、さにあらず。あたしなんかバイリンガルだかねと、垂れた胸を張る町のオネエちゃんにも結構多い。なりよりも、文化人と知識人に多い。まあ、世の中に、これほど馬鹿な人種もめずらしい。ピアスの辞典風というと、文化人・知識人とは、定見・見識のない人間のことである。

「明治新政府」に対する反乱は、陰に陽にくりかえし続けているが、中でも圧巻だったのは、世にいう「昭和軽薄体」で、その狼煙をあげたのは、三島由紀夫だった。昭和 33 年に週刊明星に連載した『不道德教育講座』である。これを昭和軽薄体の嚆矢とするのは、いまのところわたしひとりだが、そのうち定説になるにちがいない(『不道德教育講座』を日本文学史上の大事業とにらんでいるのは、わたしだけだと思っていたら、中島梓が名著『ベストセラーの構造』の中で、これに言及していた。やはり、炯眼の士というのはいるもんだね)。

昭和軽薄体はその後、筒井康隆、野坂昭如という変種を横目でみながら、散発的にゲリラをくりかえし、ついに、橋本治、椎名誠、吉本ばななで圧倒的に開花した。この三氏の偉業を理解できない人は、たぶん、芭蕉の凄さもわからない人だろう。

さて、とりとめもない話になってしまった。ほんとうは、authority vs legitimacy という深遠な問題を探究したかったのだが、まくらに力を入れすぎ、思考回路がうまくつながらなかった。失敗、失敗。そのうち改めて、挑戦します。ジャンジャン。

(1995年5月号)

authority vs legitimacy

わたしは authority に出会うと「ばーか」と思う。その場は恐れ入ってみせるが、裏にまわってべろりと舌を出す。legitimacy に出会うと「すげえ」と思う。畏敬の念をおぼえる。心が澄んでいく気がする。これは、単なる気性問題だろうか。

authority とは東条英機であり、legitimacy とは芭蕉である。authority はいつひっくり返るかわからないが、legitimacy は時を超える。

authorized by, legitimized by ときて、そのあとの主語は何か。前者は「明治新政府」、後者は「熊つあん八つあん」と言えば、わかりやすい図式になるが、現実がそう単純ではないことは、頭の単純なわたしにもわかる。とりあえず、people と言っておくしかないが、抽象的に言うと、authorize するのはご都合主義であり、legitimize するのは伝統である。伝統をもうすこし具体的に言うと、民族が血であがなった悲しい知恵であり、自然への畏敬であり、死者とともに生きる喜

びである。

authority はかなり明確だが、legitimacy はかなり曖昧だ。この曖昧に耐えられない人間は、いつの世も、authority を目指す（近頃のオウム騒動で、わたしが言いたいことがあるとすれば、それは曖昧に耐える精神の欠如である。わたしは、曖昧に耐えられないことを、精神の墮落と考えている）。

define してもむなしから、以下に illustrate する。

ノーベル賞受賞後、洛陽の紙価を高めた大江文学はどうか。民衆がいかに authority に弱いのか、改めて実証されたではないか。うん、それは認める。たしかに、authority の前にひるむ人は多い（わたしもそうだ）。追従する人もいるだろう。しかし、legitimacy のない authority に心服する人はいない。

大江氏受賞の感想を求められて、文学者の多くが口をもごもごさせていたのが印象的だった。まさか、おめでたい話にケチをつけるわけにはいかない。わたしも感想を求められ（マスコミからじゃないけど）、答えに窮した。最近のものは何も読んでいないからだ。大江を読んでいたのは高校生までで、あまりに馬鹿馬鹿しいからその後は一冊も読んでいない。ひょっとしたら、最近は少しはマシなものを書いていたかもしれない。

ある分野の作品（製品）の優劣を、自分の目と頭で判断できない人がいても不思議ではない。かりに、文学について、一億総目利きになったら、日本経済はまちがいなく崩壊する。いろいろなところで日本経済を支えている人たちが、たまに文学でも読んでみようかと思ひ、authorize された本を手にするというのは、なにも由々しきことではないし、とがめることでもない。そしてわたしは、大江の本を読んで「感動した」という主婦を、嘲笑するつもりもない。また、大江にしたって、ノーベル賞をもらうために書き続けたわけではないだろう。やむにやまれず、書き続けたにちがいない。

昭和 30 年代だったと思う。志ん生に「芸術祭賞」をやるうということになった。やるうと決めたのは文部省の役人で、役人に嘸などわかるわけではないから、legitimize されたものを authorize しようと思ったのである。志ん生は三越で一席やることになった。「わたしは、ああいうのは好きでないんで、わざとヘンテコな遊びの嘸をして」と思って、『お直し』をかけた。『お直し』というのは廓ばなしだが、吉原というような高級な世界ではない。下の下の下の下の「けころ」の世界である。その後しばらく、「女郎買いの嘸をして、大臣から賞をもらいまして」というのが、志

ん生の自慢だった。

文部省もずいぶんイキになったと、当時話題になったが、別にイキになったわけではない。どんな authority も、legitimacy の前には屈せざるをえないという一例にすぎない。志ん生はその後、紫綬褒章をもらい、勲四等瑞宝章をもらい、落語界の三冠王などと言われた。しかし、勲章をもらってから、志ん生のファンが俄然増えたなどという話は、ついぞ聞かなかった。

昭和 59 年、大相撲秋場所。1 敗の多賀竜を、2 敗の小錦が追う展開となり、相撲協会も栈敷もパニックになった。小錦は入幕わずか 2 場所目。通常なら、西前頭 6 枚目は上位と総当たりする位置ではないが、国技の威信をかけて、審判部は 11 日から連日、横綱、大関をぶつけてきた。ところが小錦の勢いは止まらない。11 日目、横綱隆の里を押し出し、12 日目、大関若島津を寄り切り、13 日目、関脇大乃国を上手投げ、14 日目、最後の砦と思われた横綱千代の富士をぶつとばして押し出し。さあ大変。国技館は黒船以来の大騒動。千秋楽、小錦は大関琴風のすくい投げに敗れ、多賀竜が 2 敗で逃げ切った（ちなみに、多賀竜は 2 大関に当てられたが、横綱との対戦はなかった）。数日後の読売新聞の川柳に、「琴風に殊勲賞やるわけにいかず」。当時の高橋義孝氏の発言に、「小錦は人間じゃない」。

それからというもの、館内は、小錦が負ければやんやの拍手、勝てばしーんと静まりかえるという繰り返し。さて、みなさん。自分が失敗すれば会社中大喜びで、成功すれば会社中しらけってしまう、そんな職場で、みなさんは何か月我慢できますか。

平成元年、九州場所。大関小錦、初優勝（14 勝 1 敗）。優勝を決めて土俵下におりてきて、涙をこらえきれなかった力士を初めて見た。

それから 2 年。平成 3 年の九州場所、13 勝 2 敗で 2 度目の賜杯。明けて平成 4 年、初場所が 12 勝 3 敗、春場所が 13 勝 2 敗で 3 度目の賜杯。横綱昇進は見送られた。横綱審議委員会への諮問すらなかった。「これは人種差別だよ。金髪や黒人だったらどうなの。今回、なれなかった理由は一つしかない。それは僕が日本人じゃないからだ」。この発言は波紋を呼び、さっそく TIME がとびついた。The American-born Konishiki creates a ruckus outside the ring (May, 4, 1992)。相撲協会が問題にした「品格」に対し、小錦は新聞記者にこう漏らした。「横綱の土俵入りは雲竜や不知火じゃなくて、（ポール牧の得意芸）指パッチンでやるうかな」

平成 5 年の九州場所を最後に大関陥落。10 勝すれば返り咲ける翌 6 年の初場所、西張出関脇で 2 勝 13 敗。

このころから、小錦が勝ったときに、ぱらぱら拍手が起こるようになる。小錦は言った。「同情はいらない」。ぱったり前に落ち、腹にべっとり砂がつく毎日。しかし、幕尻近くまで下がってはなんとか勝ち越す小錦に、館内の拍手は増えていった。

ここ数年の観客の条件反射 - - 若貴勝てば大はしゃぎ、若貴負ければ悲鳴のあとのしずけさや。

今年、夏場所2日目、小錦は人気大関若乃花と対戦。

若乃花の右の差し手を抱え込んで左に振ると、大関たまらず俵を割った。愛される「お兄ちゃん」の敗北に館内しずまりかえると思いきや、どっと歓声があがった。鳴りやまない拍手を聞きながら、わたしはしずかに泣いた。ついに、小錦八十吉は legitimize されたのである。

(1995年6月号)

金持ちと貧乏人

世の中には「金持ち」というのが、いるものである。私はカネには縁がないが、小さい頃から不思議と金持ちには縁がある。

ああ、こういうのを「金持ち」というんだろうなと思う友人にMがいる。子供のころ、Mの家に遊びに行くと、テーブルの上に無造作に置かれたバナナがまぶしかった。小・中学校の級友だから、会うと、「よしむら（蕎麦屋）は三代目になって、すっかり変わった」というようなローカルな話になる。

Mは大学生のころ、辻占いに「あなたは一生、カネに困らない」と言われたそうで、まったくもって、カネに困っている風が微塵もない。「きょうはカネがない」と私が言えば、黙って勘定を払い、「きょうはカネがある」と私が言えば、黙って勘定を払わない男である。ワンカップ大関とイカの足を買って、公園のベンチで飲んでも、葡萄屋に予約を入れ、フルボディの赤を抜いても、駈蕩として、その場にふさわしいという稀有の男である。

さて、このMの社会的地位はというと、中小企業のしがらみがないサラリーマンである。給料の愚痴など聞いたことがないから、さぞかしたくさん貰っているのだろうと思っていたが、あるとき、私の借金の保証人になってもらい、書類の年収欄を見たら、なんと私より少ないのでびっくりした（女房がたくさん稼いでいるという話も聞くが）。

生活の悩み、仕事の悩みなど聞いたことがない。聞いた悩みといえば、恋の悩みぐらいのものである。それが、こっちを向かせたい女がこっちを向いてくれないという悩みではなく、複数の女性にはさまれて苦しいという悩みなんだから、グヤジイ！。Mといっしょにいと、ぼかぼか日向ぼっこをしているような気分になってくるから、そりゃあ、猫も寄ってくるだろうし、女も寄ってくるだろう（女が寄ってきてカネに困っている男というのを見たことがない。カネに困っているのは、女を追っかけている男である）。

さて、その一方で、この世には貧乏人というものがある。みなさんのまわりにもたくさん棲息していると思うから、いまさら解説する必要はないであろう。しかし、貧乏人なのに、本人にその自覚がないという不思議な種もいるから、早見表を作ってみるのも、無駄ではない。

〔金〕カネに困ってない。
〔貧〕カネに困っている。

〔金〕たまにカネの話をする。
〔貧〕いつもカネの話をする。

〔金〕1銭たりとも多くは払わない。そして、1銭たりとも少なくは払わない。
〔貧〕たまに数千円も多く払う。そして、それ以上にしばしば、払うべきものを払わずに平然としている。

〔金〕いいものを着ている（高いものとは限らない）。
〔貧〕みっともないものを着ている（ボロを着てれば、心もボロだ）。

〔金〕うまいものがわかる。
〔貧〕うまい・まずいは、値段でしか判断できない。

〔金〕スポーツ、釣り、囲碁・将棋、そのいずれかをやる。
〔貧〕そのいずれもやらない。

〔金〕歴史と古典を読む。
〔貧〕ハウツーものを読む。

〔金〕暇はないが、時間を作れる。
〔貧〕暇はあるが、時間を作れない。

〔金〕いつも、ひとの話を聞く。
〔貧〕いつも、演説する。

〔金〕喧嘩しない。
〔貧〕すぐ喧嘩する。

〔金〕自分にも志があるから、ひとさまにも志があると思う。

〔貧〕自分がやっているのは正当な経済行為であり、ひとがやるのは不正な蓄財行為だと言う。

〔金〕毎日昇る太陽は違うと思う。

〔貧〕毎日毎日同じことが繰り返されると思う。

〔金〕ひょっとしたら自分が間違っているかもしれないと思う。

〔貧〕絶対に世の中が間違っていると思う。

〔金〕好きなことしかやらないから、努力を努力と思わない。

〔貧〕へぼ筋にはまっているから、何をやるのもつらく、自分はひとより努力していると思う。

〔金〕両方がトクになることを考える。

〔貧〕キミのためだと言いながら、自分のことしか考えていない。

そして、なんといっても最大の特徴は、

〔金〕女にもてる。

〔貧〕女にもてない。

まあ、一人の人間の中に、〔金〕要素と〔貧〕要素が同居しているのが現実なのだろうが、私はというと、

生まれてこのかた、カネには困りっぱなしで、三度のメシより喧嘩が好きで、まったく女にもてないのだから、判定に迷う必要がない。

しかし、つらつら考えてみるに（貧乏人は考える暇があるのである）、そして、Mのような男を見ていると、金持ちというのは、要するに、品性と教養とライフスタイルのことだと思えてくる。

だいぶ前から、米国では中間層が没落したと言われるようになった。何カ月か前、某週刊誌がその問題を取り上げ、グラフを見ると、たしかに、中間層がぐんと減っていた。しかし私は、「統計というのは、自説に都合のいいように作られる」ことを知っているから、グラフの下のかまかい文字を見てみた。貧困層は年収1万ドル未満、中間層は1万ドル以上～7万ドル未満、富裕層は7万ドル以上となっていた。中間層を年収1万～10万ドルと定義しなおして統計をとれば、中間層は増えているのではないだろうか。しかしまあ、それは別にして、年収7万ドル以上が富裕層なら、日本はフューだらけになるではないか。なのに、これほどピンボークがあふれているのはどういうことか。「家がせまい」なんていう問題だけじゃないと思うけどね。

(1995年11月)

いい時代が来る

新年の挨拶にこんなことを言うのもナンだけど、私は、翻訳者とは世を忍ぶ仮の姿、ほんとうは、哲学者なのです。あっと驚くタメゴロオー。哲学者だから、過渡期の向こうを見ている。歴史の大きな流れが見えるかどうか、過渡期を歴史の本質と勘違いしてしまうかどうか、ヘーゲルとマルクスの差なんです（ここで哲学とは何かを定義しておく、他のあらゆる学問がカバーできない分野を考えることである。「ねえ、ママ、ぼくもいつかは死ぬの？」と子供に聞かれたら、「そうよ」と答える以外にない。それが真実だから。「だったら、生きていたってしょうがないね。いったい何のために生きるの？」と、再度問い詰められて、「それを考えるために、坊やは生まれてきたのよ」と答えられれば、そのお母さんは立派な哲学者である）。

20世紀は、ひとことで言えば、人間性を破壊した世紀だった。革命と戦争の世紀が終わって、21世紀はいい時代になると漠然と思っていた。思っていたが、

その「いい時代」をイメージできなかった。悲観的な材料を並べていけばキリがなく、なによりも環境破壊のペースが凄まじい。人類はあと百年生き残れるかどうかも分からないというシミュレーション結果を発表する学者まで出てきた。

ところが、正月三が日、のんびんだらりと読書と思索と午睡の日々を送って、俄然「いい時代」のイメージが鮮明になってきた。とほうもなく気持ちが明るくなって、元気が出てきた。何を讀んだかという、どれも泣く子もだまるベストセラーばかりだから、いまさら私がご推奨するには及ばない。

時代が変わる、パラダイムが変わるという時には、ずいぶん前から、その予兆というのはあるもので、その時は気がつかないが、あとから振り返ってみると、ああ、あれだったのかと思う。

もう何年も前のことだが、当時まだ元気いっぱいだったソニーの盛田さんが、「競争に勝てばいいという時代は終わった」と言うのを聞いてびっくりしたこ

とがある。「勝ちつづければ滅びる」というのは、バクチの世界では常識だが、まさか、ビジネスの世界で。負けている者が「共生」を説けば、負け惜しみにしかな聞こえないが、勝っている者が負け方を真剣に考えはじめたのである。

大航海時代のスペイン人やポルトガル人がとりわけ残虐だったわけではない。ただ、南米に渡って、地べたをうろちょろしている汚い動物を自分たちと同じ人間とはどうしても思えなかった。それで、インディオを虫けらのように殺して行って、当時のキリスト教徒の胸は痛まなかった。いま、その頃の記録を読むと、吐き気がする。

近頃は、ライオンやゾウを撃つのをさえまならないが、ひと昔まえ、タスマニアで英国人ハンターが標的にしていたのは人間だった。

いまは、なんとなく当然だと思っていることでも、すこし時が流れれば、ひどく下劣で陰惨なものに思えてくる。そうしたもののひとつに、「支配」とか「独占」がある。「ここさえ抑えれば、親の総取り」のゲームが飽きずに続いていて、それをカッコイイと思っている人はまだ多い(知的領域でいえば、知っていることを、ひとには教えないというゲームである)。実際、あるところを抑えて、ひとり勝ちした企業があったから、みんなが同じルールで血眼になったのも無理はない。しかし、外野席の一番うしろから眺めていると、ビル・ゲイツは「帝国主義」の幕引きにしか見えない。石油メジャーのパラダイムが終わるということである。もちろん、石油メジャーがおとなしく引き下がるわけではないから、壮絶な戦いが予想される。その血みどろの争いが何年、何十年続くかわからないが、「支配者」が姿を消すのは時間の問題である。

利権を抑えて、あとは左団扇で暮らしていこうと考えている人は、やがて、オナラ以下の下種と思われるようになる。そんなことを言っても、ピンとこない人も多いと思うから、ひとつだけ実例を紹介する。

EM技術で世界中から引っ張りだこの比嘉照夫さんのお話。比嘉さんのグループは、EMの技術指導をして、その結果あがった利益はすべて、その国に落とすようにしている。一円たりとも外に持ち出さない。しかも、その利益を、その国の自然農法、環境保全、薬を使わない健康法、関係農家のモデル事業、人材育成、関連研究機関への支援事業以外には使ってはならないという合意ができなければ、技術指導をしない。そうでもしないと、せっかくのEM技術が特定の人や組織の金儲けの道具になってしまうからだ。現に日本の大手商社が、EM技術を「ぜびわが社で」とアプローチ

してきたが、比嘉さんはきっぱり断ったそうだ。もちろん、比嘉さんはEMで何件か特許をとっている。その気になれば、いくらでも儲けられる。だが、比嘉さんはこう言う。「もとは菌。自然に存在していたものの利用価値を、たまたま私が最初に気づいただけ。利権にかかわることは一切求めません」。

世界の農業関係者で、ドクター・ヒガの名前を知らない人はいない。いまのところ、21世紀型人間は、単なる変わり者にすぎない。

たしかに、世の中はそう簡単には変わらない。しかし、10人に1人ぐらいが、ああそうかと気がつけば、世の中はがらりと変わる。

わたしが英語の雑誌を読みはじめたころ、ボランティアというものがどうにも理解できなかった。アメリカにはずいぶん暇人がいるようだが、日本ではこんなものは絶対に根づかないと思った。それから10年もたたないうちに、日本の若者が世界各地でボランティアとして活躍するようになった。

また、マーロン・ブランドだったか、ポール・ニューマンだったか忘れたが、死ぬ以外にないアジアの子供たちを養子にしている、それがとうとう10人を超えたという記事を読み、まったく酔狂なヤツがいるもんだと呆れた。

その私が去年、「フォスター・ペアレント」のパンフを取り寄せた。驚いたことに、日本人会員はすでに5万人を超えていた。

金儲けにいそしんでいる人に、「金儲けはもう古いですよ」と言うのと、きょとんとした顔をする。命より金を大事にしているお前が、そんな「きれいごと」を言うなど、大半の人は怒る。いや、きれいごとではない。それが生存条件になるんです。生存に一番敏感なのは子供たちで、子供と話していると、そのことがよくわかる。21世紀を背負うのは、任天堂キッズではなく、せっせと貯金している親を笑う子供たちである。

なぜ、生存条件かという、嫌われ者は生きられなくなるからだ。あんなイヤなやつはいないが、抜群の営業成績をあげているんだから仕方がない、ほうっておけ。いままでは、そうだった。これからはもう、そういう人は役に立たなくなる。だって、利潤の最大化を追求するのが企業だろう。ふるい、ふるい。どうやって儲けすぎないようにするか、それが企業の使命になる。すでに世界各地に(もちろん日本にも)、そうした企業は存在する。

当然、教育ママが血道をあげる方向も変わってくる。どれだけ思いやりがあるか、どれだけ笑顔がステキか、どれだけラブレターや年賀状をもらったか、そういう

ことが自慢のタネになる。能力をみがくと同時に、人格をみがいていくことが人生の目標になる。人相が悪い私がこんなことを言うのもヘンだが、これからは「人相」が人を評価する際の重要な尺度になる。人相は悪いけど、能力があるなんて人は、どんどんお払い箱になる。考えてみれば、昔はそうだったわけで、ここしばらくの異常な時代がようやく終わろうとしているにすぎない。嫌われ者がどんどんおちぶれていく、いや、みずから有害ホルモンを分泌して自滅していく - - ああ、考えただけでも胸がわくわくする。バカヤロ、もしそうだとすれば、おまえみたいな嫌われ者は真っ先にくたばる口だろう。そんな陰口が聞こえてくる。耳が痛い。ご説ごもっとも。これからは言動に注意し、悔い改めて、男を磨いていきます。

サイエンス、テクノロジーについては、専門書にゆ

ずるとして、私にはっきりイメージできるのは「富」の概念がまるであってしまふことである。これまでの富の前提になっていた「不足」が解消してしまうからだ。なにを寝言を言っているのかと呆れるかたもいらっしやるでしょう。いいんです。誰にでも寝言を言う自由くらいはあるんですから。大丈夫、気は確かです。人間が絶望的なまでに階級的な動物であることも忘れてはいません。「いい時代」が来るまで、「大変な時代」が続くのでしょうか。社会的には、大量の失業や貯金の紙屑化という事態もありえない話ではない。個人的に言えば、収入半減くらいで済めば万々歳で、ホームレスになる覚悟くらいは必要かもしれません。しかし、かりにその日を拝むことなく路頭でくたばるとしても、いい時代が来ると思って生きたほうが、どれくらい楽しいかわからない。(1996年1月号)

今世紀最大のミステリー

腕にからきし自信のない武士が、剣の達人と果たし合いをすることになった。死ぬ覚悟はできたが、武士としてぶざまな死に方はしたくない。そこで、ある高僧のもとを訪れ、決戦に臨む心構えを教えてほしいと頭をたれる。高僧いわく。「無念無想で上段に構えよ。ひやりとしたものを感じたら、間髪入れず一刀両断にふりおろせ」。相討ちの勧めである。

剣の達人にすれば、へボ剣士と相討ちになったのでは浮かばれない。両者にらみ合ったまま、しばし、やがて達人の額にたらたらと汗が流れ、「拙者の負けでござる」と膝を折る。この話にはいろいろバリエーションがあるが、どれも「戦わずに勝負がつく」ところがミソである。作り話だろうが、なかなかよく出来ている。

日本将棋連盟では、将棋の普及に多大な貢献をした者に名誉段を贈る。名誉段だから、初段だの二段だのとケチくさいことをいわず、四段や五段をくれる(もちろん、アマチュア段である)。しかし、もらった方も困ってしまう。もらった以上、自慢をしたいが、四段だの五段だとの吹聴すれば、おそろしく強いヤツに次々と勝負を挑まれる。

ある名誉五段氏、人前での勝負は用意周到に避けていたが、大事なお得意さんの将棋自慢に勝負を挑まれ、さんざん逃げ回ったが、ついに逃げきれなくなった。そこで「もはやこれまで」と覚悟を決め、プロの高段者のもとを訪れ、「負けっぷり」について教えをこた。プロ棋士のアドバイスはこうだった。

悪手をさして、しまったと思っても、顔に出しては

いけない(「まった」など論外である)。それには深い意味があるのだという顔をして悠然と構えている。意表をつかれても、うんうんと軽くうなずき、それは読みのうちだという涼しい顔をしている。そして、序盤から中盤にさしかかるところには、形勢が悪くなっているだろう。そこで長考に入る。いや、考えるフリをする。10分、15分、20分ぐらいのところ、すこし苦しそうな顔をする。それから穏やかな顔に戻して

仁平和夫の名訳ビジネス書

トム・ピーターズの
サラリーマン大逆襲作戦シリーズ

ブランド人になれ!

誰にも頼らず自分の力で生き抜ける人こそブランド人だ! 本物のプロをめざすサラリーマン・バイブル。 ●13000円

**セクシープロジェクト
で差をつける!**

しびれるほどカッコいいか——つまらない仕事をわくわくするようなプロジェクトに変える50項目+α。 ●13000円

知能販のプロになれ!

「おしゃれな経理部」「燃える総務部」……今まで白い目で見られていた間接部門の職場を、収益を生み出す知能販売部署に変身させる50項目。 ●13000円

起死回生

トム・ピーターズの激変する経済環境の下、もはや従来の経営手法は無力となった。鬼オトム・ピーターズが説く究極のイノベーション論。 ●16000円

TBSブリタニカ 東京都目黒区目黒1-24-12
☎03(5436)5721 〒153-8940

いって、30分を過ぎたころ、「これまでです。ありません」と言って頭を下げる。

相手は驚く。中盤の入口で、最後まで読み切ってしまうとは、これはやはり「ただもの」ではない。

プロの将棋は、詰むまでやらない。勝ち筋が「ない」と見た時点で投了する。最後の最後まで諦めてはならず、土壇場で大逆転があるのは、将棋も他の競技と変わらないが、詰まされる寸前までさすのは、「棋譜を汚す」として、棋士は嫌う。

プロの棋戦はだいたい120手前後で勝負がつく。つまり、どちらかが投了する。将棋をよくご存じない方のために説明しておく、100手というのは、先手が50手さし、後手が50手さしたという意味である。したがって、「～手まで」という終了手数をみれば、どちらが勝ったのかわかる。奇数であれば、後手が投了、偶数であれば、先手が投了したのである。一方が2手続けてさすことは許されない。カワリバンコにさすのがルールである。昔、相手の寄せが予想以上に速く、1手違いで負けた升田幸三先生、家に帰って、「きょうはなんだか、2手続けてさされたような気がする」とぼやいた。それを聞いた奥さんが色をなし、対局相手に電話をかけ、「2手続けてさすとは、卑怯じゃありませんか」と抗議したというエピソードが残っている。持つべきものは、可愛い女房である。

さて、手数の話であるが、平成6年8月、第35期王位戦・第5局、羽生善治は郷田真隆の猛攻の前に、わずか56手で投了した（強いと思われたくて投げた

のではない。この敗戦で、羽生は1年間「王位」を失った）。しかし、これぐらいで驚いてはいけない。記録を調べてみると、史上最短の手数は、な、な、なんと「1手」なのである！縁台将棋の悪ふさげではない。生活と意地と名誉をかけたプロ棋士の公式対局である。前代未聞、空前絶後、驚天動地、言語道断横断歩道とはこのことか。

ありえない。先手が1手さしたとたん、後手はうーんと唸って、「負けました」と頭を下げたということか。後手が1手もささずに、自分の負けを読み切ってしまったとすれば、先手必勝ということになり、将棋というゲームは成り立たなくなる。たしかに先手が有利だと言われてはいるが、プロの棋戦で、先手の勝率は5割をすこし上回る程度である。

今世紀最大のミステリーと言わねばなるまい。

いったい、何が起こったのか。

みなさん、すこし考えてみてください。

「答え」は最後のページの右下にあります。

〔ヒント〕対局者ふたりは、対局前も対局後も心身ともに健全でありました。つまり、先手が1手さしたとたん、後手が心臓発作で倒れたという類の話ではありません。

【答え】おねがいしますと両者頭を下げて、対局が始まり、先手がしばらく考えていると、何を勘違いしたか、後手が先にさしてしまった。先手は驚いた。記録係も驚いた。この1手で、後手の反則負け。

(1996年11/12月号)

| | | | | | | | |
|---|--|--|--|---|---|---|---|
| <p>成功を約束する創造的未來の発見法</p> <p>ジョエル・バーカー著 仁平和夫訳</p> <p>本体=1359円</p> | <p>パラダイムの魔力</p> <p>ノーマン・オーガスチン／ケネス・エーデルマン著 仁平和夫訳</p> <p>本体=1500円</p> | <p>最高経営責任者シェイクスピア</p> <p>古典に学ぶリーダーの掟</p> <p>ジェリー・カプラン著 仁平和夫訳</p> <p>本体=1748円</p> | <p>ザ・起業物語</p> <p>ゴードン・ベスリン／スコット・ヒューラー著 仁平和夫訳</p> <p>本体=1800円</p> | <p>シリコンバレー・アドベンチャー</p> <p>大逆転！</p> <p>バトリック・レンシオーニ著 仁平和夫訳</p> <p>本体=1400円</p> | <p>なぜあなたのチームは力を出さきれないのか</p> <p>トム・コネラン著 仁平和夫訳</p> <p>本体=1400円</p> | <p>ダイズニー7つの法則</p> <p>奇跡の成功を生み出した「感動」の企業理念</p> <p>デイブ・ロンガバーガー著 仁平和夫訳</p> <p>本体=1400円</p> | <p>7億ドル企業をつくらせた学習障害者(仮題)</p> <p>オハイオ州の奇跡を起こしたCEOは、かつて学習障害(LD)、どもりてんかんという三つのハンディを持つ少年だった。</p> <p>近日発売</p> <p>予価 本体=1800円</p> |
| 発行：日経BP社 | | 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-1 塩崎ビル | | 日経BP社の書籍・雑誌のご案内 | | (本体価格に消費税がかかります) | |
| 発売：日経BP出版センター | | tel 3221-4640(編集) tel 3221-7200(営業) | | http://store.nikkeibp.co.jp | | | |

ネズビット 『よい子連盟』 酒井邦秀訳 (国土社)

もっと古語をうまく使えたらな、といつも思う。ここで言う「古語」とは、文語、漢語、雅語などをひっくめた非日常的な感じの表現を漠然とイメージしている。古語を使いたいと思うのは、自分の訳文を読み返してみると、デキの悪い大学生のレポート風、もしくは、ゆるんだ女子高校生の日記風の文章になっている、われながら赤面するからだ。今風の口語表現だけを使って、読むに耐える文章を書くというのは、天才だけに許された特権なんだとしみじみ思う。

しかし、どうにもならない。表現力の問題にいく前に、英語をちゃんと読めないという厚い壁にぶつかってしまう。よほどの駄文書きでない限り、英語を書く人だって、古語をうまく使っているにちがいないと思うのだが、読んでいてわからない。thou とか thy とかいう単語が出てくればともかく、綴りが現代英語になっていれば、どれが文語的でどれが口語的表現なのか、さっぱりわからない。

英語を読んでいて、あっ、これは十七世紀の小説に出てきそうな表現とか、あっ、これは吉本ばなな風英語とか、ぱっと分かり、それを相応の日本語でバシッとキメられる、そんなスゴイ人、いるわけないよなーと思っていたら、いたのである。酒井邦秀さんである。しかも酒井さんは、それを児童文学でやったのである。近年稀に見る快拳というべし。

ネズビットの名前に覚えがなくても、『若草の祈り』や『火の鳥とカーペット』の作者だといえ、あっと思う人もいるかもしれない。『よい子連盟』の原書は、The wouldgoods. Puffin Classics のペーパーバックに入っている。

さわりを紹介してみよう。

'Come hither', let us take refuge in yonder covert while this good knight does battle for us.

いざこなたへ。このしんせつなる騎士さまが、われらのために戦ってくださいます。そのあいだ、かなたの木かげに身を寄せましょうぞ。

P.S. It turned out Daisy was not really dead at all. It was only fainting -- so like girl.

追伸 デージーは、ぜんぜん死んでいなかったのです。気絶です - - あーあ、女の子ってのは。

After breakfast Albert's uncle said --

'I now seek the retirement of my study. At your peril violate my privacy before 1.30 sharp. Nothing short of man -- or rather boy -- slaughter shall avenge it.'

So we knew he wanted to be quiet.

朝ごはんのあと、アルバートのおじさんがこうい

いました。

「さて、わたしはこれから書斎にこもる。一時三十分より一秒でもまえに、貴重なる静けさをやぶる者は、それさうとうの覚悟をしておけ。侵入は血をもってあがなわれ、復讐は人殺し、いや、男の子殺しをもってとげられるであろう」

つまり、静かにしてくれっていうことだな、とわかりました。

Anyway, it's there. It's our duty to restore it to its sorrowing owners. I say, look here -- we're going to drag the moat.

とにかくいまは、堀の底にあるのだ。なげき悲しむ持ち主の手に財宝をもどしてあげること、これこそわれらの務めである。つまりさ、堀をさらうんだよ。

No human being knows half the treasures hidden in this dark tarn.

山深き小沼の底に沈める宝、知る人もなし。

Now then, my hearties, pull together, pull with a will! One, two, three.

さあさ、みなの人衆、心を合わせて気ばってひいとくれよ。いいち、にいのお、さん。

and the fight began. The others hearing the noise of battle from afar, hastened to the field of action. そのとたん、まくら投げの戦いがはじまったわけです。ほかの連中も、はるかかなたから戦いのどよめきを聞きつけて、戦場にはせさんじました。

Here lie I, between earth and sky,
Think upon me, dear passers-by,
And you who do my tombstone see
Be kind to say a prayer for me.

天地 (あめつち) の
間 (はざま) に一人眠るわれ、
行きずりの
旅人よ、心寄すべし。

わが塚を
目にせし人も、心あらば、
手向けの祈り
わがために。

Afterwards father said he wished we had been allowed to remain on our pristine ignorance, whatever that is. And perhaps the dark hour did dawn when we wished so too. But a truce to vain regrets.

あとになって、お父さんは、

「ああ、なんじら、けがれなき無知を去らざりしかば」

といったけれど、なんのことやら。でも、ひょっとすると、ぼくたちも同じことを祈るはめになったのかもしれない。されど、ああ、後悔さきに立たず。

and the next moment the two were rolling over on the grass, and very soon Noel was made to bite the dust. And serve him right. He is old enough to know his own mind.

つぎの瞬間、二人は芝生の上をごろごろ取っ組みあっていましたが、たちまちノエルは一敗地にまみれました。ざまあみろ。こうなることはわかっていたはずだ。

'Ah, me!' sighed a slender maiden of twelve summers, removing her elegant hat and passing her tapers fingers lightly through her fair tresses.

「ああ、なんていうことでしょう」と、年のころなら十(と)とせあまり二(ふた)とせ、細身の乙女が上品な帽子をぬいで、ほっそりした指を豊かな黒髪に、かるやかにすべらせて申しました。

Could we not, even now, at the eleventh hour, turn to account these wasted lives of ours, and seek some occupation at once improving and agreeable?

もう残りすくない休暇とはいえ、いまからでもおそくはありませぬ。なんとしても、むなしくすぎた昔をいまにかえすために、人のため、われらのためともなる「わざ」をなしたいもの。

翻訳のスーパー・テクニクも紹介しちゃう。

'Yes,' Alice said, 'and the Society for the Prevention of something or other, and the Young Men's Mutual Improvement Society, and S.P.G.'

'What's S.P.G.?' Oswald asked.

'Society for the Proagation of the Jews, of course,' said Noel, who cannot always spell.

「そうよ」とアリス。「なんとか防止連盟とか、青少年相互向上連盟とか、それから防犯連もあるわ」

「ボウハンレンってなあに？」

ときいたのは、オズワルド。

「帽子反対連盟にきまっているだろ」

といったのは、あまり字を知らないノエル。

'Perhaps it was only the wind blowing one of the doors to. I'll go down and see, if you will, Dick.'

Dicky only said --

'The wind doesn't shoot bolts.'

'A bolt from the blue,' said Denny to himself, looking up at the sky.

「ひょっとしたら、風が吹いてドアがしまっただけかな。ぼくが行って見てくるよ。ディッキーも行くならね」

ディッキーは、あっさりこういいました。

「風が、さし錠なんかさすもんか」

「風吹けどおどらず」。空を見上げながら、デニーがこうつぶやきました。

Oswald learned the names of all these trees and plants on the day of the picnic. The others didn't remember them, but Oswald did. He is a boy of what they call relenting memory.

オズワルドはこういう名前を全部、ピクニックの日におぼえてしまったのです。ほかの子は忘れてくれど、オズワルドはおぼえたのです。彼は、いわゆるサクランキョウキの人なのです。

酒井さんの訳書をもっと読みたいと思うのだけれど、残念ながら、この一冊しかない。

去年の春、筑摩書房から『どうして英語が使えない?』を出した。

英語の water の意味は「水」ではなく、head の意味は「頭」ではありません。また、a few は「二、三の」ではなく、of course は「もちろん」ではありません。

こんな書き出しで始まる超刺激的な本。こちらの方も一読をお勧めします。(1994年6月号)

『日本語先生奮闘記』

梅田星也著、大修館書店

中国の長沙大学外国語学部日本語科で、日本語を教える梅田先生のぐふふふ・グググッ・エッセー。

読んでいると何度もぐふふふと顔が崩れ、ときに鼻の奥が熱くなってグググッと鳴るのです。

中国人大学生の日本語の上達はおそろしいほど早い。卒業時には、きれいな発音で、すばらしいスピーチをして、梅田先生を泣かせてしまうという。教師冥利に尽きるとはこのことか。日本の大学の外国語学部で、卒業時に、勉強した外国語でそんなスピーチができる学生がはたして何人いるだろうか。

中国の大学生はみんな、とても英語が達者だ。「どうしてそんなに英語が上手なの」と聞くと、だれもがこう答える。「はい。中学と高校で6年間、勉強しましたから」

この本は、本屋さんに置いていないでしょうし、わたしがいくらお勧めしても、多分だれも買わないでしょうから、胸に残るエピソードをいくつか紹介しておきます。

* * *

〔背景説明：長沙大学の英語科と日本語科の対抗意識は凄まじい。ある日、梅田先生は英語科の女性に通訳してもらい、そのあと談笑しながら帰った。翌日、日本語科の女子学生数人に取り囲まれ、猛然と詰め寄られる〕

「あなたはきのうの午後、英語科の学生達と道路に沿って歩きました。大変うれしかったですね。なぜですか」

「私達の日本語は、まだ不完全です你知道吗。し

かし、あなたの通訳をできるの確信があります」

「あなたは英語科と語ります。ました。私はそれを非常に好きません」

「あなたは私達の先生です。それなのに、いいえ、にもかかわらず、英語科は、いいえ、英語科が、いいえ、英語科を、う。私は平静ではありません」

「そうです。あなたは英語と散歩で、道路の上でします。私は気持ちが高揚で緊張です」

「私も心が興奮でたまりません。いいえ、たまりません。あなたはいけませんの先生です」

中国の女性は強い。天の半分を支えている（毛沢東）。まだ一年半しか日本語を習っていないのに、教科書からはなれて、自分の日本語で、よくこれだけ咄嗟に話せるものだ。かわらしい口から言葉がポンポン飛び出してくる。私に期待している気持ちが強く伝わってくる。私はうれしかった。

* * *

「ちょっと、あなた。そこを読んでみてください」

学生は困惑した。まず、「ちょっと」とは何であろうかと考えた。ちょっとは「少し」の意味だろう。「少しあなた」とは何だろうか。ひょっとして「小さいあなた」かもしれない。自分は小さくはない。まあいいやと立ち上がった。さて、「読んでみてください」とは今まで聞いたことがない。「読む」と「見る」と二つも動詞がある。

「先生、読んだあと、何をみますか」

* * *

学生は日本語学習の第一歩で「五十音図」を完全に暗記させられる。動詞の活用を覚えるためには、どうしてもこれが必要だ。学生は次のように横の段も覚える必要がある。上一段・下一段の活用を考えるのに必要である。

アカサタナハマヤラウ
イキシチニヒミイリイ
ウクスツヌフムユルウ
エケセテネヘメエレエ
オコソトノホモヨロウ

私はずいぶん長い間、たぶん二十年以上も、これを言ったことがなかった。あるとき、学生達は私が「エ段」を言えないことを発見した。エケセテでつまって先が言えなかった。学生達は驚愕して言った。

「先生！先生はそれでよく下一段活用が言えますね。そんなことがあるのですか」

* * *

NHKの国際放送ラジオ・ジャパンをよく聞く。ある女性の「声の広場」の投書に

「初めて中国を旅行しました。言葉は通じませんが、私がニッコリすると、中国の方もニッコリしてくださって、完全に心と心が通じ合い、温かいものを感じ

ました」

という大変不思議なものがあつた。中国では言葉は通じなくても心が通じるそう。超能力現象か、テレパシーによるものであろうか。私は1987年以来中国に住んでいるが、そんな思いをしたことはない。

この前、中南工業大学から招待された時のことだ。車が迎えに来るといので、アパートの門の前で待っていた。ちょうど約束の時間に車が来た。私がニッコリすると、運転手もニッコリした。それで私と家内は急いでドアを開けて乗り込み、座席に坐った。しかし、いっこうに発車しない。つまり、それは全く関係のない車だったのだ。

運転手もわれわれ夫婦も両方ともニッコリしたのだが、お互い心も通じなければ、私の中国語も通じなかった。しかし、投書の女性が言ったように、確かに温かいものは感じた。顔が赤くなったからだ。

* * *

〔福井工業大学の学生百余名りが、体育交流団として中国に来た。受け入れ校の日本語科の学生は通訳として大奮闘。四日間の大会は幕を閉じ、空港まで見送りに行く〕

中国民航のエンジンが始動して、別れの時が来た。中国人が二列に整列した中を、日本人学生が一人一人握手しながら飛行機の方へ歩いて行く。「さよなら」「グッバイ」「再見」。そして飛行機は曇り空の中を、上海の方へ消えていった。

学生たちがばらばらと私と家内を取り巻いた。みんな泣き顔をしている。次々に言いだした。

「私は日本語を話せることを誇りに思います。私の日本語は日本人に通じました」

「私は日本語が上手だと言われました。うれしいです」

「私は日本人と直接話ことができました」

「先生と奥さん、ありがとうございました」

「先生、日本に帰らないで、いつまでも中国人に日本語を教えてください」

そしてオイオイ泣きはじめた。大役を果たした満足感と、連日の緊張からの解放感で、放心状態にある学生たちは泣きつづけた。家内もつられて泣いた。大柄なうえにハイヒールをはいている彼女らに取り囲まれて、背の低い私は何も見えず、また何も言えず、突っ立って、ただ熱いものを感じていた。

「自分の外国語が相手に通じた」「自分は外国語を話せた」。この喜びはすばらしいものだ。経験した者にはよくわかる。

* * *

国際貢献人とは、梅田先生のような人のことを言うのだろう。（1994年12月号）

玉村豊男『種まく人』新潮社

何年か前、テレビを見ていたら、日本ではもはや絶滅したと思っていた顔がにゅっと現われておどろいた。西瓜が笑っている顔というか、太陽が笑っている顔というか、なんの屈託もない、つるんつるんした笑顔がそこにあった。

ちょうど南仏プロヴァンスの大ブームの頃で、「ピーター・メールはぼくの真似をしたんですよ」と、その西瓜顔は笑う。

それはトークショーのような番組で、聞き手の女性アナとのやりとりが実に面白かった。「ちかごろは、お野菜が高くて困ります」と言えば、「いや、野菜はもっと値上がりしてくれないと困ります」と答える。

「農園の仕事を体験したいと思っている都会の人がたくさんいますが、そういう方たちを受け入れる用意がありますか」と聞けば、「いや、迷惑です」と答える。

やがて文章に話がおよぶと、「読む人の元気が出るような文章をと、それだけを心掛けています」と言う。

笑う西瓜怪人、玉村豊男さんは、83年に軽井沢に転居。91年夏、長野県の東部町に三千坪の土地を買って移住、そこで無謀にも赤ワインづくりを始めたのである（三千坪と聞いて嫉妬に狂わないでください。四百万円もあれば、千坪ぐらい買えるんです。なにしろ、日本は土地があまっていますから。ワインづくりは、『私のワイン畑』（扶桑社）に詳しい）。

玉村豊男さんはすでに名エッセイストの地位を確立していたんだけど、私はうかつにもその名前さえ知らなかった。すぐに書店に走り、玉村さんの本をかたっぱしから買い込んできた。以来、新刊は欠かさず買っている。

あわてて読む本じゃないから、本箱に放り込んでおく。そして、心が病んだとき、つくづく仕事がいやになったとき、簡単な料理を作り、キッチンのテーブルで酒を飲みながら、玉村さんの本を開く。いいかげん酔っぱらったあとは、寝床に持ち込んで読みつづける。

不思議に元気が出てくる。血がたぎるような元気ではなく、「やすらかな」「すこやかな」と形容したい元気がしずかに全身にひろがっていく。

「そろそろ死ぬ場所を探しはじめるのも悪くないな、と思ったのは、四十二歳の誕生日が近い夏のことだった」というのが、『種まく人』の書き出しである。

私は大病をわずらったことがないのだが、夏の日に死に場所を考えたのは、玉村さんより何年も早かった。

親父が死んだ年齢を超えると人生観が変わるとよく言われる。私の親父は私が二歳の時にくたばったから、

私はもう五年以上も親父より長生きしているのである。これは実に妙な気分なのだ。わからない人にはわからないと思うが、親父の年を超えると、不思議に「見すべきものはすべて見つ」という心境になる。あとは「余生」だと思っちゃう。余生というと、なんだかどうでもいいように思われるかもしれないけど、「刈り入れ」のシーズンが来たということなのね。

玉村さんのエッセイを読んでいると、「なつかしさ」をおぼえる。この「なつかしさ」はどこから来るんだろうと、いろいろ考えてみるんだけど、よくわからない。土の匂いがして、風の音が聞こえるから、というのは、おそらく本筋じゃないね。江戸の戯作の血筋をひいているんだろうかと思ってみたりもする。もちろん、江戸の戯作ほど、ひねこびてはいない。だが、「人生に目的なんか無い」と悟った時のすがすがしさは一脈通じるところがある。もちろん、玉村さんは江戸の戯作者とは違い、近代を経験しているから、「個の自由」という束縛からは簡単に逃れられない。しかし、人間の意思とは関わりをもたない自然を、閉じられた時空として予感すると、暑苦しい「個の自由」という密室も、いくらかは風通しがよくなるみたい。

玉村さんが一貫して描いてきたのは「人間のいとなみ」である。ご本人がそういう言葉を使っているわけじゃないけど。「いとなみ」って、なんだか物悲しい言葉だよ。たとえば「夫婦のいとなみ」とかさ。夫婦なのに、いまさら何やってんの？っていう感じでしょ。おんなじ行為でも、夫婦以外でやれば、もっと妖しくて艶っぽいかもしれない。だけど、「間男とのいとなみ」とか「オフィスラブのいとなみ」とかは言わない。「いとなみ」ってのは、予定調和の世界を前提にして、黙々と励むものなのね、きっと。

近代ってのは、予定調和をテッテテキに馬鹿にして、そこからの脱走に血眼になってきたんだけど、気がついてみれば、お釈迦さまの掌の上で得意になって暴れていた孫悟空みたいなものだった（まだ、そう気がついていない人も多いけど）。近代では「疲れを知らない男」が英雄視された。前近代では、「疲れを知る男」が美しい男だった（もちろん、オデッセウスも）。超近代でも、たぶん、そうなるだろう。

さて、「物悲しい」に話は戻るけれど、財布を落としちゃったり、女にふられたりした時には、物悲しいとは言わない。物悲しいっていうのは、グヤジイという激情ではなく、そこはかたなくただようものでさ、

人生の実相をふと垣間見た瞬間に、心の水面がさざなみを打つようなもんなのね。「いとなみ」に物悲しさがつきまとうのは、たぶん、その繰り返しにあるんだと思う。繰り返しなんだけど、今回はかならず前回とは違う。その微妙な「ずれ」に、あるとき、心が顫えるわけ。つまり、人生に意味があるとすれば、「いとなみ」を味わうことしかなくて、「いとなみ」っていうのは、うんとキザに言うと「無常迅速」なんだね。

それで、文章の格調って何で決まるかという、物悲しさがあるかどうかで決まるみたい。つまり、「物悲しさ」があると、どんな文章でも、ブンガクになるってわけさ。

玉村さんの初期のものは、極上のユーモアにあふれ

る痛快エッセイなんだけど、『種まく人』はもう完全にブンガクだよ。だから、若い人にはお薦めしない。豚に真珠の譬えもあるからさ。

私は残念ながら、玉村さんみたいに顔がまんまるくないし、頭は禿げ上がっていないから、あんな西瓜みたいな笑顔はつけれない。そうかと言って、胡瓜みたいな笑顔というのも貧相な感じがする。せめて、トマトみたいな笑顔をつくれなものかなあ。そう思いながら冷蔵庫をあけると、トマトが入っていたので、このやろうとかぶりつき、ビールを飲んだ。うまかった。
(1995年7月号)

この世で一番安い本

コスト・パフォーマンスから言って、辞書・辞典の類が一番安いということは、誰もが思うことだろう。

最近、芝山さんから「買え！」と厳命されて購入したVIKINGの『TOTAL BASEBALL』には感動した。どういう本かという、題名の通りの本と言うしかない。副題が、The Official Encyclopedia of Major League Baseball、2552頁で45ドル。神田のタトルで買って、9000円ちょっとだった。しかしこれは、1年たつごとに、1年分データが不足していく。よほどの大リーグおたくでない限り、毎年買う人はいないと思うけど、5年に1回ぐらいは新しいものを買わないといけな(第4版とあるから、第5版になったら、買わないといけな)。

一度買ったなら“一生もん”という意味で、圧倒的にお買い得なのが、NELSONの『STRONG'S -- EXHAUSTIVE CONCORDANCE OF THE BIBLE』。聖書の索引辞典。不思議にどこにも値段が書いてない。銀座の教文館でこれを見つけたとき、万札数枚は覚悟して、おそろおそろレジに持っていったら、6000円と言われ、世の中が急に明るくなった。

辞典・年鑑・索引の類は別にして、こんなに安い本があってイイものかと思ったのが、ダールのほぼ全作品を一冊にまとめたペンギンのペーパーバック『THE COLLECTION SHORT STORIES OF ROALD DAHL』。わずか8.99ポンド。円が今ほど強くない頃だったが、3000円はしなかったような気がする。持ち歩くのにやや嵩張るという欠点はあるけれど、何回読み返しても面白いし、まさにお値打ちものの一冊。これが、私がいままで買った本の中で一番安い本だと思っていたが、上には上があるものである。

先日、書店をぶらぶらして、腰をぬかすほど驚いた。RUNNING PRESSが出している『THE UNABRIDGED』、シェイクスピアの全作品(詩も含む)を一冊にまとめたものである。値段がなんと17.95ドル、2566円だった。家に帰ってきて、私はさっそく巻尺を取り出した。B6版に近い形で、厚さは8センチあった。寝かして置いても、立てて置いても、安定度が変わらないところが凄い。

(1995年11月号)

『日本語誤用・慣用小辞典』 - 国広哲弥（講談社現代新書）

「鞍上書を読む」という言い方がある。馬の鞍の上で詩を推敲したという中国の故事があるらしい。日本でも、明治の頃は、「馬上ながら書を手離さず」なんて言っている人がいた。

この間、知人の見舞いに行く途中、なんと、自転車に乗りながら本を読んでいる人を見た。のどかな田園の道ではない。ブーブー車が行き交う東京の交差点である。しかも、その人は車道を走っていた。ハンドルの上に開いた本に目を落としながら、ゆっくりゆっくりペダルをこいでいく。わたしは信号待ちをしながら、「鞍上書を読む」人の姿をしばし茫然と見送った。余計なお節介かもしれないけど、いくらなんでも危ないんじゃないの。

さて、寸暇を惜しんで本を読むという話じゃないけど、電車に乗っている時間というのは、なんとも手持ち無沙汰なものである。それで、わたしはいつも、どこから読み始めてもよく、どこで読み終わってもいいような文庫か新書をカバンに放り込んでおく。鞍上用ならず、電車用の書である。長い間、文春文庫『ジョージ君』シリーズのお世話になっていた（東海林さだお氏には、ぜひともノーベル雑文賞をあげたい）。

しかし、このシリーズのいけないところは、面白すぎる場所である。鞍上ならいさ知らず、大勢の見知らぬ者が異常接近する電車の中で、突如「あはははは」と笑いだすのは、公序良俗に反する行為である。よしんば、懸命に笑いをこらえたとしても、あっと気がついたときには、降りるべき駅を通り過ぎていることがある。これは、電車用の書としては、致命的な欠陥であると言わねばなるまい。

したがって、電車用には、適度に面白く、適度につまらない本を用意する必要がある。そこで最近、カバンに放り込んであるのは、『日本語誤用・慣用小辞典』である。

独壇場は「どくせんじょう」が正しく、「どくだんじょう」は誤りであることぐらいは私も知っていたが、堪能は「かんのう」、消耗は「しょうこう」、洗滌は「せんでき」が正しいなんて、知らなかったなあ（ちなみに、私が使っているワープロでは、誤用で打ち込まないと漢字に変換してくれない）。しかし、著者の国広氏は、この手の本を書く人にありがちなゴチゴチの石頭ではなく、上のような誤用は「慣用」として認めている。この本を読んでいると、誤用が生まれ、それが慣用に育っていく背景には、それなりの理由があって、超オーバーに言えば時代の要請があることがわかる。

言葉にはちゃんと典拠があるから、正用と誤用ははっきり白黒がつくが、正用だからといって通りの真

ん中を大手を振って歩けるとは限らない。

この本にも出てくるが、わたしも何度か「気がおけない」論争に巻き込まれたことがある。そして、たいていの場合、意見が真っ二つに分かれて結論が出ない。わたしはこれを「気を使わなくてもいい」という意味だと信じているが、まったく反対の意味に受け取る人が半分ぐらいいるとすると、この表現は避けたほうが無難なようだ。

ひとの誤用を笑うのは（ひとの誤訳を見つけるのと同様）、人生のたまらない快樂である。

この本に出てくる「座薬って書いてあったから、坐って飲んでいる」というのは、いくらなんでも作り話くさいが、何をかくそう、わたしは一時期、食事を一時中断して、「食間」と書かれた薬を飲んでいたことがある。

二、三日前、宅急便の会社から電話があった。「お留守だったので、荷物を持ちかえりました。明日、改めてうかがいたいと思いますが、いらっしゃいますか」。そう聞かれて、「ええ、いらっしゃいます」と答えてしまった。

文章なら推敲できるが、一発勝負の会話やスピーチではそうはいかない。一番トチリやすいのが結婚式のスピーチである。慣れない人は緊張するし、なにより忌み言葉という始末に悪いものがある。わたしは何度か結婚披露宴の司会を務め、忌み言葉をひととおりは覚えた。しかし、披露宴で人さまのスピーチを聞いていると、けっこう忌み言葉は出てくる。誰だって、不吉な言葉は避けようと思うが、「出る」「離れる」「戻る」なんて、知らずに使ってしまう。そして、たいていの人は気にしない。気にする人はいても、ことを荒立てようとはしない。なにしろ、おメデタイ席なんだから。

言い間違いの心理を、フロイトがどこかで書いていたような気がする。言っではいけない言葉が、頭のどこかを強迫していると、かえって口に出てしまうらしい。

これは聞いた話だが、友だちが出席した結婚披露宴で、新婦の会社の同僚（女性）がみごとなスピーチをして、最後に「おふたりのご不幸を心からお祈りしています」とやってしまったそう。さすがに、場内はしずまり返ったという。花嫁も、そのスピーチをした女性も、友だちの部下だということから聞いてみた。

「そのふたり、仲が悪いの？」

「いや、大の仲良しだった」

ふーん、それじゃやっぱり、思わず本音が出てしまったんだろうな。（1996年2月号）

『早引き - 連想語辞典』 米谷春彦・編集（ぎょうせい）

去年の夏頃、ビジネスマンが独力で八年かけて「使える類語辞典」を作ったという新聞記事を読んで、さっそく買いもとめた。ビジネスマンが作ったのなら、実用一点張りに違いないと思ったからである。

編集方針にこう書いてある。「本書は“あるイメージからより適切な語句を見つける”いわゆる検索辞典で、言葉の意味を解説した『国語辞典』ではない」。うんうん、意味なんて要らない要らない。

『早引き』というのが、何を意味するのか不明だが、たしかに使ってみると、類語辞典より引きやすく、早く結論が出る。

どういうふうを使うかということ、たとえば、「没落」という言葉が浮かんだが、それではどうもうまくないという時に、「没落」を引くと、

壊滅。失脚。斜陽。凋落。転落。倒産。破産。滅亡。落ちぶれる。衰える。

いずれもしっくりこないときは、たとえば、その中から、「斜陽」を引いてみる。

夕日。落日。衰退。没落。落日。

さらに「落日」を引いてみる。

下り坂。斜陽。衰運。衰退。左前。不振。衰える。

ただ単語がずらずら並んでいるだけかということ、項目によってずいぶん差がある。たとえば、「議論」を引くと、

～が空回りする＝堂々巡り。～が出尽くす＝煮詰まる。～が甚だしい＝鼎の沸くがごとし。～がまちまちでまとまらない＝甲論乙駁。意見・～が一致しない＝平行線をたどる。結末のつかない～＝水掛け論。激しい～＝激論、口角泡を飛ばす。（大半を省略）

とまあ、こんな具合の辞典なのです。箱とカバーを捨ててしまったので、正確な値段はわからないが、たぶん4000円ぐらいしたと思う。859頁。高いか安いかはみなさんのご判断。半年あまり使った私の経験からいうと、10回に1回ぐらいは役に立つ。ちなみに、俗語はほとんど出ていない。（1996年3月号）

高島俊男『本が好き、悪口言うのはもっと好き』

これはB Z Wの嶋田水子さんから薦められて読んだものである。嶋田さんに教えられるまで、ぼくは高島という人の名前さえ聞いたことがなかった。最近、会う人ごとに「高島俊男はおもしろいよ」と、頼まれもしないのに宣伝係を買ってでているのだが、どうやらあまり名前が売れていない人らしい。

「ああ、高島俊男ね。高島兄弟の上だっけ、下だっけ」なんて言う人もいる。

「高島兄弟って、ナニ？」

「ほら、高島忠夫の息子たちだよ」

「??？」

『本が好き』という本は、最初から読みだすと、ちょっととっつきにくい感じがするかもしれない。口うるさいジジイの単なる小言のように思えるかもしれない。エッセー集だから、どこから読んでも支障はなく、「V ネアカ李白とネクラ杜甫」から読みはじめよう、お薦めする（「高校生諸君に」という副題がニクイ）。凡書万巻が束になってかかっても、この30頁足らずの一篇にかなわない。達人の文章とはこういうものかと、ため息が出る。オーバーに言うと、

生きていてよかったと思う。古本屋の店頭で、ニーチェがふとショーペンハウエルの著作を手にとって、それから三日三晩読みふけり、「これは自分のために書かれた本」だと震えるほど感動したという話は有名だが、ぼくが『本が好き』を読み終えたときの感動はそれに近いものだった。

「V ネアカ李白とネクラ杜甫」と「VII 湖辺漫筆」（俳諧に興味がない方は「VI なごやかなる修羅場」はパスしてもいい）を読んでから、「I うまいものあり、重箱のスミ」「II 新聞醜悪録」に戻って読み進むと、ジジイの小言に素直に耳を傾けようという気持ちになる。

I と II は、ぼくが言いたいことを代弁してもらって、じつに気持ちがイイのだが、同時に、自分の無知を改めて思い知らされる。

たとえば「ゲキを飛ばす」。すこし本文を引用する。

「なさない負け方に腹を立てた星野監督は選手を集めてゲキを飛ばした。

これはねえ、もし言うなら『活を入れる』と言うんだよ。『ゲキを飛ばす』というのは、遠くにいる味方（あるいは味方になる可能性のある勢力）に呼応をよ

びかける書信を発すること。例えば鎌倉幕府打倒に立ち上がる決意をした武将が、『共に拳兵しよう』という手紙を持たせて使者を各地に派遣する。その手紙が『ゲキ』、漢字で書けば『檄』だ。目の前にいるやつを叱りつけるのをゲキなんて言うものか」

ああ、恥ずかしい。ぼくは、目の前にいるやつに「ゲキを飛ばす」という文章を何度か書いている。

また、たとえば「私淑」。日頃指導を仰いでいる先輩に敬意を表したいときに、「私淑している」なんて書いてしまう。ところが、高島先生はこうのたまう。

「私淑するというのは、はるかに師と仰ぐことであるにきまっている。直接教えてもらったなら、それはもう私淑ではなく師事である」

私淑の出所は『孟子』にあり、「自分は後世に生まれたために孔子先生の教えを受けることはできなかったけれども、その教えを伝える人たちをつうじて、孔子先生に私淑いたしました」と、孟子は言っているそう。

うーん。だけどね、たとえ非公式にせよ、なんらかの師弟関係にない限り、「師事」というのは使いにくい気がする。そういうときは「尊敬している」と言えばいいんだろうね。「私淑している」なんてヘタに気取ると、恥をかく。自戒、自戒。

まあ、そんな例をあげていけばキリがない。ぼくほど無知な人はいないだろうが、オレの日本語の使い方は完璧に正しいと自信満々の方も、本書をお読みななれば、一度か二度は赤面するんじゃないだろうか。

『本が好き』の奥付をみると、第10刷とある。第1刷からわずか8か月で10刷である。いい本がよく売れるというのは、うれしいものである。

奇貨おくべし(この使い方、正しいのかな?)、ぼくはさっそく、著者紹介にある主な著書というのを全冊注文した。一冊だけ早く届いて、昨夜読んだのが『中国の大盗賊』(講談社現代新書)。これもまたメッチャ面白い。新書一冊で中国の歴史の本質がきれいにわかっちゃうというウソみみたいな本である。中国についてトンチンカンなことを言う人は『三国志』を読んでいないというのが定説だが、あんな長いものを読んでいる暇はないという方には、是非お薦めの一冊である。

(1997年1/2月号)

市場原理に任せて何が悪い!
政府は経済に手を出すな
ロバート・J・バロー 仁平和夫訳 定価(本体)600円+税
日経ビジネス人文庫
ウェルチリーダーシップ・31の秘訣
ロバート・スレーター 仁平和夫訳 定価(本体)600円+税
10秒間@マネジャー
インターネット・スピードで経営するための7つの心得
マーク・フライアー
アーミン・A・プロット 仁平和夫訳 定価(本体)300円+税

日本経済新聞社

〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5 電話 03-5255-2827
http://www.nikkei.co.jp/pub/ * 本体価格には消費税が効きます。

数学に強くなると、だんだんお金がたまってくる!

数学力 これだけでできれば 人生リッチ!

All the Math You Need to Get Rich

ロバート・ハーシー【著】仁平和夫【訳】

財テク、保険、宝くじ、競馬、車の買い替え、住宅ローン...

お金をめぐる決断の方法、人生を豊かにする発想の

すべてをこの一冊に凝縮! 1100円(税別)

プレジデント社 〒102-8641 東京都千代田区平河町2-13-12

TEL 03-3237-3731 FAX 03-3237-3746

あの不埒な乞食どもがひとたび町に火を放てば.....

『映画評論』1973年1月号より

仁平和夫

田冬冬氏から、仁平和夫が22歳のときに書いた唐十郎「鉄仮面」の劇評のコピーをいただいた。当時、仁平は『映画評論』の常連だったようだが、他の号はまだ探せていない。このエッセーは70年代初めという時代の雰囲気をよく映したものだが、さまざまな意匠の裏に、翻訳家として花咲いた仁平の資質の一端がみえるように思える。全文を紹介する。なお、原題ははるかに長く、「あの不埒な乞食どもがひとたび町に火を放てば、白粉婆々の出廻らしメンツだって、まだまだ白昼を塗りつぶせるほどには赤いのだ」である。(山岡)

なるほど、鉄仮面に魅せられた女は、男の首をそのままノコギリびきにする他はあるまい。かつて、鉄の貞操帯に魅せられた男が、女の腰をそのままノコギリびきにしたように。そして、鉄仮面が血生臭い限り、女の持ち歩くポストンバックは、鉄仮面のやさしい揺り籠だ。しかし、ポストンバックの中で、一個の生首へとすり替わってしまう鉄仮面とは、一体何者だろう。鉄仮面が幻の貞操帯でない限り、謎はポストンバックの方にあるのかもしれない。リックサックの中に一杯つめこんできたはずの上海が、東京の路上で目もあてられぬガラクタにすり替わってしまうように、女のポストンバックもまた、一つの玉手箱なのだろうか。夕暮に、女がフラリと立つ公衆便所の金かくしの底には、あの伝説の乞食たちが、息をひそめて首領の合図を待っている。

再び上野不忍池に舞台を求めた状況劇場の新作「鉄仮面」は、その乞食たちの奇天烈な襲撃に幕をあける。磨赤児という一大ゴロツキを失った紅の玄洋社の活路は、今や束になってゴロをまく、集団奇襲戦法にありや。大乱戦の土煙の仲、風を切って現れる闇の頭領に、上野の森が声かける。「唐ア--！」

肉体という言葉が一つのファッションとして、足早に通り過ぎて行ったようには、まだ何も終わってはいない。そして、早トチリの状況追随主義者が、いきり立って願うようには、全く何も変わってはいない。乞食城に君臨する唐十郎のふてぶてしい面構えが、ただひたすらにファシストの貌をおびてゆくだけだ。

唐十郎が、平穏な町の白昼に、不穏な川原の闇を対置させてからすでに久しい。あの日さらわれて行ってしまった少女たちをさらいもどすことが、唐の欲望の原点だったとするならば、卑猥に白粉を塗りたくった乞食どもの数々の狼藉は、さらわれて行ったまま大人になってゆこうとする少女たちへの、まっ赤な挑発であったに違いない。闇を占拠した乞食どもの狂宴の快楽に、まださらわれたことのない少女たちは、もう我

先にとつま先立ってしまうのだ。町を追われて河原に散って行った不穏な者たちに、町は今、その多くの娘たちをさらわれようとしている。一度股を濡らし始めた処女たちには、どんな処世訓も一切役には立たないのだ。そして、どんなに町の出入口を固く閉ざしたところで、彼ら河原の乞食たちは、闇のマントをまとって辻に現われ、町の公衆便所を次々とくぐりぬけて行ってしまふのだ。

<何処から何処へ>という亀裂に悩まされ続けている昭和末期の迷い子たちにとって、その迷路の街角に立つ紅のテントは、やはりまだまだ大きな呪いなのだろう。現実原則に胸ぐらをつかまれて、ずるずると引きずられてゆく我々の時間は、すでに顔色を失くしたのっぺらぼうの白い帯だ。唐十郎に時間を逆撫でされ、ハッと振り返ったときにはもう、時間は血みどろになってのぞけている。はぐれていった時間への執拗な襲撃は、河原の向こうに流れる白昼の時間が、完全に息の根を止めるまでくり返されるのだろう。そして、左手に握りしめた鞘が割れるたび、河原の演劇はその匕首を持ち構えるに違いない。

川に出生した墮胎児たちの母親探し、生き別れになった妹たちの姉さん探し、捨てられた女たちの情夫探し--そして、焼け跡の空、上野の森、満州の曠野--唐のドラマが怪しく息づくのは、はぐれて行ってしまったものたちへの、恋しい殺意が漲るときだ。坂道を転がり落ちてゆく馬糞のごとき時間と、その尻を追いまわす新装開店の風景は、もはや豆腐ほどの手応えも持ち合わせていない。はぐれて行ってしまった時間の糸は、必ずや何処かでプツリと切れているが故に、ヘソの緒の悪夢は、その切り口の凝血を許しはしないのだ。母親の胎内から垣間見た空の謎は、今なお墮胎児たちの魂を怯えさせている。唐十郎の胎内巡りが、いつもどこかしら殺気立っているように見えるのは、彼の子宮帰りが、至福のまどろみを夢見る、単なるノスタルジックな退行願望とは異なり、母の胎内に

残した傷痕のカサブタをひっぺがして、その底にひそむ恐怖の在処を垣間見ようとする、それ自体、悪夢のような不埒さに満ち満ちているからではあるまいか。その意味では、唐の母恋いドラマは、そのまま母殺しのドラマであるのかもしれない。しかし、それがどんなに惨たらしい回路を辿って行こうとも、唐が<主役>である限り、はぐれて行ってしまった時は、忽然とロマンの彼方に甦ってくる。唐が、「行くぞおっ！」と叫んで立ち上がりさえすれば、時代は尻尾を巻いて棧敷の奥へと逃げ込んでしまうのだ。

だからこそ、明智小五郎が主役になってしまう時代ほど、つまらぬ時代はない。謎は謎であるが故に、世界を包み、世界を切り裂く。解かれてしまった謎は、すでに謎ではない。怪人二十面相が、ロマンの塔から足をすべらせてしまったのは、小林君の瞳が、あまりに美しすぎたためかもしれないが、いつも小林君の尻の臭いを嗅ぎまわっていた怪人二十面相にとって、マントは大事なロマンの宝庫だったのだ。ロマンの塔からまさかさまに落ちてゆく怪人二十面相のマントから、二十の仮面がボロボロとこぼれ落ちるやいなや小林君は、その白い咽をかつ切ってしまった。そのとき飛び出した真っ赤な唐縮緬は、それこそ「あっ」と言う間に消え失せてしまったが故に、我々のうなされた眼玉をえくり出してくれたのだ。

パッと飛び出す唐縮緬の破滅の赤さに咽をかつ切ったまま突っ立っていられる少年は、今、唐十郎をおいて他にいない。なお、唐十郎のみが、怪人を向こうに廻して奮戦する美少女の血気を持ち合わせている。ロマンの塔へ向かう唐の幻視行が、けっして行きだおれに終わることがないのは、それが、あらゆるマンネリズムを意に介せぬ永遠の冒険譚だからだろう。少年の貌を失ない、腰砕けになった青年の醜悪さのみを増してゆく昭和末期が、いかに不幸な時代であれ、紅のテントを引きずって馬にまたがり、幻の曠野を疾走する唐十郎は、あの金太郎、桃太郎であり、あの小林少年なのだ。赤い腰巻が、そしてチョビ髭や金歯までが似合ってしまう少年が、この世に二人と現存するのだろうか。

あれは確か「煉夢術」という怪しげな書であったらと思う。表紙をめくるやいなや、その巻頭に、まるでアカンベエをするがごとく顔を出したナルキッススの幻影に、私は唾然とさせられた。この写真を眺めな

がら、にわかに劣情をもよおした挙句、誰よりも恍惚としてしまうのは、唐十郎自身ではあるまいか。あのナルシスティックな微笑みは、けっして救われることのない少年少女たちに向けられたものではない。だから、上野不忍池からずぶ濡れになって這い上がってくる彼の微笑みに、感きわまって、「唐ア！唐ア！」と絶叫する不幸な少年少女たちの愛の言葉は、あのナルキッススの伝説どおり、悲しいエコーになってしまう他はないのだ。

「『美少年的なもの』とは、見失われた我自らの幼年期がイデア化されたものに他ならない」とする稲垣穂氏の「『少女嗜好』だって、やはり水増した少年嗜好だ」という解釈を、そのまま寝床の中に抱き込んでくるとすれば、唐が上目づかいに熱っぽく凝視し続けてきた「あの少女嗜好」も、「美少年的なもの」である唐十郎自身のナルシズムと、何処か暗いところで、あるいはしっかりと手を握り合っていたのかもしれない。満州の砂嵐の中、内田良平に寄り添っていたあの可憐な少女は、「美少年」内田良平のナルシステックな魔鏡の一つではなかったのかと、フト思うときがある。「少女フレンド」を持った婆アが一番怖いという唐の恐怖は、すでに死臭を放ち始めている骨と皮が、いまだに「美少年的なもの」を垣間見させている恐怖なのではあるまいか。

そして、「まるで、美学の皮剥ぎ人のように、私の手が少女の血でまみれることを願うとは一体何故のことなのか？」と唐が言うとき、私は、自らの咽をかつ切らんとする唐の欲望の艶姿を、幻視してしまうのだ。続けて唐が言う、「恐らく、それは私にとって、一番遠い他人が少女であるからなのだろう」という、私にとってひとつのパラドックスは、臉の遠い裏側で、今や円環を閉じようとしている。美が、絶対的に少年のものである以上、美学の皮剥ぎ人が少女たちに向かって投げつける愛の刃は、あまりにも破滅的なブーメランとなって、己の咽元に帰ってくるしかないだろう。

古来、絶世の美少年は、必ず魔王の傍に侍り、その生死を共にしてきた。他愛ない私の願望的デッチ上げによれば、唐十郎の情死の相手〔つれあい〕は、白馬にまたがった魔王土方巽その人なのだが、やはり唐の情死は、一人手鏡の中で遂げられるのだろう。

『映画評論』1973年1月号より

いちご
一期は夢よ - 天才翻訳家、仁平和夫

山岡洋一

夭折、といえは人は笑うかもしれない。52歳といえは、孫がいても不思議でない歳、落語の世界ならご隠居さんの歳ではないか。だが、翻訳の世界で50そこそこはいかにも若い。漢垂れ小僧とはいわないまでも、せいぜい尻が青い若造にすぎない。これから20年が勝負のとき、ほんとうに活躍できる時期だ。その年齢で、仁平和夫はひとり静かに死んでいった。

「藤子不二雄のようですね」といわれたことがある。そう思われるのも当然なほど、いつもふたりで出版翻訳に取り組んでいた時期がある。山岡名義で、ふたりの連名で、仁平名義で、いくつもの本を翻訳した。

いつもふたりで仕事をしていたことがじつは、ひとつの点で重い足枷になっていた。仁平和夫の翻訳だけは名訳として紹介できなかったのだ。仲間褒めではないかといわれれば、返す言葉がない。だから、仁平に勝るノンフィクション翻訳家はいないと思ってきたが、仁平の翻訳に注目するよう勤めることはできなかった。

だが、思いも懸けない形で足枷がはずれた。死んでいったものの業績を伝えるのは生きているものの義務だから、仲間褒めだとされるいわれはなくなった。だから何度でもいう。仁平和夫の翻訳は最高だと。

いつも一緒に仕事をしていたといっても、似た者同士ではない。翻訳のスタイルはまるで違う。共訳のときには、わずか1歳だが年長のわたしに合わせてくれていた。1995年ごろ、藤子不二雄流をやめてひとりで翻訳に取り組むようになって、持ち味が活きるようになった。だから、仁平和夫が本来の力を発揮した期間は、5年と少ししかなかったことになる。

仁平和夫の強みは軽妙な文体にある。翻訳というと無味乾燥な文章になるのが通り相場だが、仁平は読んで楽しい訳文を書く。ノンフィクション出版翻訳の文体に、おそらくははじめてエンターテインメントの要素を持ち込んだのが仁平和夫だ。

本人は自分の文章を軽薄と表現していた。だが、その文章が薄っぺらだとはだれも思わないだろう。ごく普通の日常的な言葉に磨きをかけて、経営など、一見日常から離れたことがらを語っていく。落語の名人芸にも通じる文章だ。そして、別冊として発行した『仁平和夫小論集』を読めば、軽妙な文章の背後に、翻訳に対する確固とした姿勢があることもわかるはずだ。

出版翻訳家としての経歴をまとめておきたい。

仁平和夫が出版翻訳ではじめて名前をだしたのは、クーン著『投資銀行』（日経BP社、1990年、絶版）である。その後、ウッドワード著『大統領執務室』（文藝春秋社、1994年、絶版）などの共訳があった。

仁平単独の名義でだしたのものとしては、スレーター

著『進化する経営』（日経BP社、1994年）が最初であった。この本は『ウェルチ リーダーシップ・31の秘訣』とタイトルを変え、文庫化されて日経新聞社から出版され、いまでも増刷をつづけている。この時期にはもう一点、パーカー著『パラダイムの魔力』（日経BP社、1995年）があり、やはり、いまでも増刷を続けている。動きの早い経営の分野で、刊行から1年を超えて読まれつづける本はめったにない。まして8年にもわたって増刷がある本は数えるほどしかない。内容もさることながら、仁平和夫の翻訳の良さが読者に受け入れられてきた証拠だろう。

仁平和夫が持ち味を發揮しはじめたころの訳書としては、カプラン著『シリコンバレー・アドベンチャー』（日経BP社、1995年）がある。鮮烈な翻訳だ。諸君、帽子をとりたまえ、天才があらわれた、と言いたくなる翻訳であった。立場上、そうはいえなかったのだが。時期がわずかに早かったため、それほど話題にならなかったが、あと2年か3年後に出版されていれば、爆発的に売れたはずである。

つぎに、仁平和夫の名前を出版翻訳関係者に印象付けた本が出版された。コネラン著『ディズニー7つの法則』（日経BP社、1997年）だ。これは文句なしのヒット作、いまでも増刷を続け、20万部を超える大ヒットになっている。ディズニーの顧客サービスの秘密を小説仕立てで紹介した経営書、仁平にぴったりの原作であり、翻訳も見事というしかない。

1998年には、『トム・ピーターズの起死回生』（TBSブリタニカ）が出版されている。翻訳の質という点で代表作とすべきものだと思うので、別項で扱うことにする。芝居の言葉でいうなら、トム・ピーターズははまり役だった。その後も『ブランド人になれ！』『セクシープロジェクトで差をつける！』『知能犯のプロになれ！』の三部作がいずれもTBSブリタニカから2000年に刊行されている。

仁平和夫にとって事実上最後の仕事になったのが、2001年秋刊行の『ジャック・ウェルチ わが経営』（日経新聞社）である。不可能とも思えるほど短期間に上下2巻の本を訳すために4人の翻訳家のチームを作り、自分は裏方に回ってなんとか刊行にこぎつけた。

翻訳家仁平和夫の素晴らしさは、いつも裏方に回る姿勢から生まれているのだろう。それが必要なら、翻訳チームのなかで裏方に回る。ひとりで翻訳をするときも、原著者を活かす裏方になる。だから、一点ごとに文体が違う。仁平和夫の翻訳は素晴らしいというと、本人はたぶん、素晴らしいのは原著者で、原著者に恵まれて幸運だったというだろう。

弟・仁平和夫

仁平勝

上智大学を中退して（正確にいうと授業料を払わなかったので除籍になって）から、弟は定職につくという志向性がなかった。ひとつの職場が長くても三年は続かなかったと思う。ある程度ひとつのところに勤めると、べつに特別な理由もなく辞めてふらりと旅行に行き、帰ってくるとまた別の仕事を探した。スナックのパーテンドー、洋食屋のコック、ラーメン屋というように飲食業が多かったが、べつにその仕事が好きだったわけではない。肉体的にはきつなくても、家まで仕事を引きずることがないから精神的には楽だというのが、そうした仕事の選択理由だった。

もっとも一時期は、自分の趣味にあわせた職業に就こうと考えたこともあるようだ。学生の頃はわたしといっしょに映画やアングラ演劇に足を運んだが、弟はそういう趣味から少し深入りして、いつのまにかシナリオの作家養成所に通いはじめ、コマーシャル映画の助監督をやったこともあった。またあるときは、状況劇場の団員募集に応募したこともある。これはなぜか唐十郎に気に入られたようで、なんと合格してしまったのだが、稽古づくめでほかに何もできないという説明を聞いて、びびって辞退してしまった。

ラーメン屋はしばらく続いたようだが、結局また例によって大した理由もなく辞めて、こんどは麻雀屋に勤めた。しかしこの就職は、さすがに不本意だったらしい。そもそも採用の条件というのは、せいぜい三十五歳までであり、三十歳を越えるともうほとんど就職口がない。つまり年齢にあまり関係ない職場が、麻雀屋くらいしかなくなってしまったということだ。ところがここで、老齢の女主人にすっかり信頼されて、店を譲りたいといわれたそう。そこでさすがに、麻雀屋で一生を終わりたいと思わなかったという。

そこで弟は、あるとき急に英語を勉強し始めたのである。そして「ニューズウィーク」日本語版のスタッフとして採用されるのだが、調べてみると「ニューズウィーク」日本語版は、1986年に創刊されている。弟はこの情報をあらかじめ手に入れて英語の勉強をはじめたのか、それとも、たまたまその時期に重なったのか、そのへんの前後関係はわからない。ともかく、猛烈に勉強したようだ。一生のうち一年くらい集中して勉強すればなんでもできる。それができなれば、たかだか一年間なのにほかのことを諦められないからだ。そんなふうに弟がいったことがある。

弟はそうした集中力とあわせて、一見正反対のよ

うに思えるが、子供の頃から要領がよかった。高校時代は、テストの選択肢の解き方なるものを研究し、問題を読まなくても8割は当たると自慢していた。その要領のよさで、「ニューズウィーク」の採用試験のときも、ひとつヤマをかけたのである。当時（1985年）ソ連でゴルバチョフが書記長に就任し、ペレストロイカが話題になっていた。そこで弟はそのあたりの関連記事が出題されると予想して、ソ連共産党の組織や役職の名前など、あらかじめ調べておかないと訳せないような言葉をしっかりチェックした。そして試験問題2題のうちの1題が、ずばりペレストロイカに関する記事であった。そのヤマが当たらなければ、たぶん合格しなかっただろう。

さて「ニューズウィーク」における仕事ぶりは、弟から聞いたことを思い出しながら書いてみる（事実と違うところがあれば、わたしの記憶違いとして勘弁してもらおう）。仕事は毎週決まった曜日に出社して、アメリカからファックスで送られてくる英文の記事を一日で訳す。このとき採用されたスタッフは、翻訳者を育てる意図もあったのかどうか、力量にかなり差があった。与えられた記事を一日まるごと使って訳す者もいれば、朝遅く出勤してきてゆっくりコーヒーなんぞを飲み、いとも簡単に片付けて午前中で帰ってしまうツワモノもいた。そこで弟は、ここでも要領のよさを発揮して、そのツワモノ氏に目をつけたのである。

朝出社するとまず英文にざっと目を通して、訳すのに難しい箇所を拾い出す。そしてツワモノ氏が帰らないうちに彼のところへ行って、その箇所をどんどん質問してしまう。ツワモノ氏の正体はわからないが、弟が翻訳家として一本立ちできたのは、彼のおかげといえるかもしれない。なにせレベルの下のほうで採用された弟が、自分よりも下のレベルだと思った者は、次々に脱落してやめていったというから、けっこう厳しいスタートラインだったのである。

当時そんな話を弟から聞きながら、私は弟がようやく自身の天職を見つけたことを実感した。そして今、いきなり主人を失った仕事場には、きちんと分類された資料のファイルが整然と並んでいる。それを呆然と眺めながら、弟なりに好きな生き方をしてきたのだと、あらためてそう思いたい。

発行人注 「ツワモノ氏」は付録32ページで紹介されている『よい子連盟』の訳者、酒井邦秀氏だと聞いています。

仁平和夫訳『トム・ピーターズの起死回生』

山岡洋一

翻訳が日本語の文体に影響を与えた例はいくつもある。古くは二葉亭四迷の『あひびき』が有名だし、最近でもたとえば野崎孝の『ライ麦畑でつかまえて』がある。何十年かたって、経営書の文体を大きく変えた翻訳として、仁平和夫の『トム・ピーターズの起死回生』（TBS ブリタニカ、1998年）をあげる人が出てきても、不思議だとはいえないように思う。

そう思えるほど、新鮮な訳文で衝撃を与えたという点ですぐれた翻訳だといえる。この訳書を「暴走だな」と評した人がいたが、だからこそ、すぐれた訳文なのだ。暴走しているのは原著者のトム・ピーターズであり、仁平は原著者の暴走ぶりを日本語で見事に表現しているのだから。

たとえば、第9章にこうある（訳書263ページ）。

ありふれ化にノーと言え

この本で一番言いたいのは、このことだ。
ありふれたものをいくら作っても、しょうがない。
イノベーションが死か。
ありふれたものを捨てるか、自分の命を捨てるか。
真剣に聞いてくれ！
お願いだから。

ワーオ！にイエスと言え

ワーオが答え

Just say no to
COMMODITY

This is ... THE WHOLE DAMNED POINT ... of this book. "Commoditization" will not do. I.e.: INNOVATE OR DIE.

L-I-S-T-E-N UP!!

P-L-E-A-S-E.

Say
yes
to
WOW!

WOW! is the answer.

(Tom Peters, The Circle of Innovation, 1997, p.308-309)

ここで使われている commoditization は翻訳者泣かせの言葉だ。「他社製品と区別がつかなくなること」を意味し、「差別化」の反対語である。「市況商品

化」という訳語があるが、どうもよくない。これを「ありふれ化」と訳したのは、たぶん仁平和夫がはじめてだ。

こういう造語の能力は、じつは翻訳家にとって不可欠なものなのだが、この能力をもたない翻訳者が多すぎる。片仮名にすればいいと思っている翻訳者が多すぎる。日本語を豊かにする義務があることを知らない翻訳者が多すぎる。

ありふれた言葉で翻訳してもしょうがない、真剣に聞いてくれ！ お願いだから。この訳文がそう叫んでいるように思う。

ついでに触れておくと、この章のタイトルは「欲しくて悶える」だ。経営書の章のタイトルにこんな言葉を使えるのは、仁平和夫だけだ。原著では Create Waves of Lustである。この章だけではない。第10章は Tommy Hilfinger Knows.を「ブランドや、ああブランドや、ブランドや」と訳し、最後の第15章は We're Here to Live Life Out Loud.を「一期は夢よ、ただ狂え」と訳している。各章の内容をとらえた見事な訳だ。「一期は夢よ、ただ狂え」の最後の部分は、こう訳されている（訳書407ページ）。

騒々しい時代に負けないくらい、声を限りに叫んで生きるガッツがあるか？ 勇気があるか？ 根気があるか？ 熱き心があるか？

私たちのキャリアのために、私たちの部署のために、私たちの会社のために、私たちの家族のために、私たちの社会や国のために。これはカネに換えられる問題じゃない。だから……

けたたましく生きる！

Will we have the guts, the nerve, the persistence, the PASSION to live our life as loudly as these very loud times demand?

For your and my careers, for our units, for our organizations, for our families, for our communities, for our nation ... it's the \$64-trillion question. So??

LIVE LOUD!

(Ibid. p.491)

生きた日本語表現を経済・経営関係のノンフィクション出版翻訳にもちこんだ天才翻訳家、仁平和夫の面目躍如たるものがある訳文だ。

個性豊かな文章家

嶋田水子

仁平さんは大胆にして細心な翻訳者だと思う。訳書をたくさん読んだわけではないのに、こんなこと書いてしまう僭越は大目に見ていただくとして……。意表をつくような踏み込んだ表現を縦横無尽に駆使するのだけれど、それを裏づけるだけの配慮はきちんと行き届いている。原文に忠実か「不実」かといった翻訳につきものの悩みなど軽々と飛び越えて、原著の勢いをそのまますくい上げ、経済書や経営書を面白い読み物にしてくれる。堅いものでも柔らかいものでも何でもござれの達人である。

仁平さんと私の出会いは 80 年代のニューズウィーク日本版の仕事場だった。何十人もの翻訳者が編集部を埋めて、肘を擦り合うように仕事をしていた時代である。当時はお互い顔を知っている程度の間柄で、言葉交すこともないまま、仁平さんはまもなくニューズウィークを辞めてしまわれた。

世の中に翻訳者は星の数ほどいるはずなのに、翻訳の世界は案外狭く、80 年代末に飛び込んだ証券業界で、仁平さんに再びお会いする機会を得た。仁平さんは、当時私のいた会社が金融翻訳を外注でお願いしていた IBT で、チームリーダーとして質の高い翻訳をハイペースでこなしておられた。その後、会社を離れて独立され、単行本で数々の名訳を残されたことはどなたもご存知の通りだが。

正確な時期は覚えていないけれど、今も忘れがたいのが、仁平さんが時々『翻訳通信』に寄稿しておられたエッセイである。豊富な知識をちりばめ、洒脱な文体でこちらを引きずり込んで、思い切り笑わせてくれる。笑いのセンスはとにかく絶品。あの明るさと生真面目さが同居していたところが、仁平さんの才能の秘密だったのだろうか。翻訳者の枠に収まりきらない、個性豊かな文章家だった。あのエッセイをもっともっと読みたかった、と仁平さんに言う機会を逸してしまったのが、今になって悔やまれる。

仁平さんは人一倍凝り性で、とことん浪花節の人でもあった。一昨年、お勤めの歌を集めた「ベスト MD」を 3 回にわたって送っていただいた。その解説によると、落ち込んで「どうもいけぬ」と思ったときは、『浪花節だよ人生は』をエンドレスで聴くのだとか。「誰かがこれをアカペラで歌ってくれるなら、私は楽譜も見ずに、口三味線、口太鼓、口鼓、口喇叭で伴奏をつけることができる」ほどのおタクである。そして、好きな歌を聴いては、涙にくれる人でもあった

らしい。

仁平さんは数多の名訳を残して走り去ってしまった。「いいじゃないの。いくら恥をかいたって、いくら失敗したって、『ああ面白かった』と言って死ねたら、それでいいじゃん」（『起死回生』の訳者あとがきより）とつぶやきながら行ってしまったのだろうか。